Historical Materials about the Regional Accounts in Kaga Domain (IV)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: UEDA, Hisao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00066982

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



加賀藩領の万雑関係史料（四）

上田　長生

紹介にあたって

これまでに引き続いて、本号では加賀藩領の地域的入用たる万雑（万造）について、越中国射水郡島村（現富山県射水市）居住の十村であった折橋家所蔵の文書に含まれる六点の史料を翻刻・紹介する。

折橋家は、寛永一二年（一六三五）に次郎右衛門が中郡（のち射水郡）十村を命じられて以降、累代同役を務めた。今回紹介する史料を作成した折橋理三郎は、天保四年（一八三三）に年寄並（十村制廃止期において平十村から改称した）役であった兄儀左衛門の名代誓詞（十村役の代行が可能となる手続き）を行ったのち、小杉新町（現射水市）に置かれた郡奉行所出役所の詰番を皮切りに、上使通行御用や庄川筋用水取入口堅普請所主付などを歴任。同九年に兄が亡くなると、家督を継いで、同一〇年には射水郡平十村役、万延元年（一八六〇）には御扶持人十村となり、慶応三年（一八六七）に没するまで務めている。

現在も折橋家には膨大な文書が伝存し、万雑関係の史料も数多く含まれている。嘉永六年（一八五三）から理三郎が御郡万雑方主付を務めていることが関係しているかもしれない。前号までに紹介したものと同様の万雑関係史料も残されている。

史料14は、嘉永六年五月の組万雑の廃止（本史料紹介（二）史料10参照）を受け、射水郡でそれまで各組で割符していた費目についての対応を、郡奉行・改作奉行に十村達が伺ったものである。史料15は、並行して進められた村万雑の計上・賦課の統一方針について郡奉行・改作奉行に指示を仰いだ伺帳の下書である。

史料16は、宿立された町での万雑の計上・賦課について砺波・射水郡奉行に伺ったもので、奉行からの指示を示す付札も貼り付けされている。宿・町は人口が多く、また交通関係の御用などもあったため、他の農村の万雑とは異なる対応が必要であった。

史料17は、組万雑の廃止への対応を三か国十村がとりまとめ、郡奉行・改作奉行に伺った史料10（本史料紹介（二））への奉行の付札を受け、射水郡に関わる箇条について郡中十村で寄合し、改めて両奉行に指示を願ったものである。ここでも、各箇条に奉行からの付札が付されている。史料18は、史料17で奉行から検討を指示されたものの、決まっていなかった点について、諸郡での協議も踏まえて三度伺ったものである。奉行側の回答は不明である。

史料19「御郡万造方品々留」は、文久元年（一八六一）から慶応二年（一八六六）にいたる射水郡の万雑関係の御用留である。郡奉行・改作奉行と十村は、万雑の整理・削減を目指す方向性は共通していた。しかしながら、幕末期の物価高騰の中で、十村の下僚である手代をはじめ、各方面から給銀の増額要求が出され、増加した公用交通や海防などに関わる負担が加わることで、万雑の削減は容易には進まなかったとみられる。史料19では、人件費の増額を奉行に願って許されたことを示す記事が散見される。

前号までは加賀藩領全体に関わる史料を紹介したが、個々の郡レベルに目を移せば、郡毎に万雑改革の展開や対応は異なっていたことが分かる。旧来の加賀藩研究において、郡毎の違いは十分に意識されていなかったが、各郡の様相が分かる史料を比較検討することで、地域差を押さえつつ十村制と藩領社会の展開を理解することが可能となろう。

本号で紹介する射水郡の他に、現在のところ、越中国砺波郡・能登国口郡（羽咋郡・鹿島郡）で郡レベルでのまとまった万造関係史料が確認でき、次回以降、順次紹介する予定である。なお、折橋家文書や砺波郡・口郡の文書群には、明治維新後の万雑に関わる史料も残されているが、まずは幕末段階の万雑の運用実態と改革を理解する必要があると考え、維新後の史料は後にまとめて紹介することとする。

なお、以下で折橋家文書の各帳面の表紙にある丸に一〇・一五などの符牒は、折橋家における整理で書き込まれたもので、「嶋村折橋蔵書」の朱印も同様である。

14、嘉永六年

「組万造指止候義ニ付諸郡ゟ御伺申上候外、御郡切奉窺帳」

（折橋家文書（三）四五）

※表紙右上の〇は朱書、蔵書は朱印

（表紙）

一〇

嘉永六年七月

（異筆）「最前取極之分ニ而不用」

（朱書）「一三」

組万造指止候義ニ付諸郡ゟ御伺申上候外、御郡切奉窺帳

射水郡

（印）嶋村 折橋 蔵書

一組ニ万造是迄高割与家割教ニ相成居候、尤組ニ高数多寡有之ニ付、是迄之姿を以御郡惣万造高年ニ依増減可有之間、大体家壱軒ニ付三拾文程宛取立、残惣高割ニ仕可然奉伺候

一無高所大門新町拾九貫文、渡り村四貫百文余、宿立守山町四貫文余、伏木村三拾壱貫八百文余、是迄組万造之内家数割を以取立来候間、御郡万造之内右之姿を以家数割取立、且無高所大門新町・朝日新町・岩上村・池田新村・間嶋新村等も同様之割合を以取立可申哉

一氷見庄鏡磨共、他国稼御過書并稼先縮証文暨帰案内書付飛脚賃等、
并他国ニおゐて故障有之雑用等、且氷見庄等御収納方江現銀御払
米等買入米方ニ付飛脚賃等諸雑用、灘浦村ゟ猟方ニ付諸雑用之義、
是迄鏡磨・猟師共暨買入米高ニ割符仕来申候、以後も是迄之通取
立可申哉

一氷見庄等出生駒毛調理料銀、是迄御郡万造ゟ相渡来候得共、以後
ハ駒数ニ割符可仕哉

一御通行転(伝)馬等余荷并諸雑用、其時ゟ組割符取立来候、以後其時ゟ
御郡割符可仕哉

一御通行之節、高岡町ニおゐて　御旅館詰并馬渡所江出役仕候御扶
持人等宿雑用之内、御用払之外御郡万造ゟ取立来候得共、不相当
哉ニ奉存候間、以後ハ於高岡ニ御用宿被仰渡候様仕度奉伺申候、
併　御旅館等詰所○向寄ニ宿被仰渡候様、訳而御達申上候
（手遠ニ而ハ御用弁不宜義ニ御坐候間、詰所）

一放生津新御蔵屋根付添地面、并下村・小杁備荒倉屋敷年貢米、且
放生津・吉久御蔵雪下シ并放生津御蔵御門前垣結人足等雑用、小
杁・下村備荒倉番人給銀、是迄斗下村ゟ指出来候、以後如何相
心得可申哉

一氷見御蔵朝日村領江転地被仰付、右地面引高ニ被仰付候処、合盛
卸立米之内、右引高定納口米引残、壱石五斗余斗下村ゟ余内指
出来候得共、不相当哉、以後如何相心得可申哉

一御通行之節、小杁　御宿　御小休御給仕人并御前(膳)水方押受役人、
上倉垣組之内ゟ罷出候者之宿余内、是迄右組万造ゟ指出来候得共、
以後如何相心得可申哉

一下村　御前(膳)水井戸修理等普請入用、是迄下倉垣組万造ゟ指出来候、
以後如何相心得可申哉

一手代給銀之義、御郡万造ゟ十村壱人江壱貫五百目取立可申、致不
足候ハヽ、十村ゟ引足可申旨被仰渡、奉得其意候、下倉垣組・上
倉垣組・下東條組・西條組・南條組五組之分壱組へ壱貫目宛、上
東條組・二上組之義庄川筋御普請等ニ付御用多、上庄組・八代組
之義山方畑所多、且猟場等諸稼を以日用渡世仕候所柄、彼是御用
多ニ付、都合四組一組へ壱貫五百目宛(三)御郡万造ゟ取立、前段九組
共致不足候分ハ、都而十村ゟ引足可申候、且雇手代料銀之義、是
迄一組百五・六拾目ゟ六百目余迄組万造ゟ取立来候得共、前条手
代給銀取極候上ハ、以後才許ニ而相弁可申哉

一御郡○惣(所)代給銀之義、五百目可相渡旨被仰渡候、小杁御郡所之義
隅(偶)日・奇日共毎日多分夜中迄相詰、其上指懸御用之節ハ及深更候
而も、御達方等御借屋等江罷出烈敷相勤、雑用費も相懸申義ニ御
坐候間、是迄御郡万造ゟ弐百目、一組ゟ百目宛都合一貫弐百目相
渡来候義ニ御坐候間、五百目之外賄雑費之方へ三百六拾目増方御
聞届可被下哉

一相談所臨時寄合飯代之義、成限り身出ニ可仕旨被仰渡候、臨時た
り共御郡○中へ抱(拘)り候寄合飯代之義、往古ゟ米代相払、賄料ハ御郡
余内ニ相成来候間、今度相改、賄料之義省略仕、壱飯三拾三文
宛ニ取極、自身并下人とも一日分六飯代百九拾八文ニ相成、其内
米壱升五合代大綱七拾文図ニ而百五文并宿料六拾文、都合百六拾
五文十村ゟ御用払為指出、残三拾三文之余内一日分御郡余内を以
取立候義御聞届可被下哉、纔三拾三文之余内ニ御坐候得共、御用
払之筋相立可申義ニ付、訳而御窺申上候、且手代飯代之義是迄組

方ゟ組余内ニ相成来候間、一日分九拾九文御郡万造ゟ取立候義御聞届可被下哉

一料紙代之義、左之通仕切銀ニ仕度奉窺候

下倉垣組・上倉垣組・下東條組・西條組・南條組五組、但一組分

六丸　中折上中下
代百八拾六匁　但平均壱丸三拾壱匁図り

七束　徳田紙
代拾九匁六分　但壱束ニ付弐匁八分図り

六千枚　鼠半紙
代六拾目　但千枚ニ付拾匁図

〆弐百六拾五匁六分　一組仕切銀

此外上東條組・二上組・上庄組・八代組、此四組ハ料紙余斗入用ニ付、一組分中折紙壱丸代三拾壱匁、鼠半紙千枚代拾匁相増、都合三百六匁六分ニ仕切申度奉伺候

一組走り之義、組ゝ不同有之、一組弐拾壱貫文迄も組万造ゟ取立来候得共、以後拾八貫文以下組ゝ示合、精誠減少仕、追而取極方可奉伺候

一惣代役人日懸り料銀并飯代、是迄組万造ゟ指出来候得共、以後其村ゟ為指出、御郡余内指止申度奉存候

一組廻藤内給銀、是迄拾五匁ゟ四拾目迄組万造ゟ相渡来候、以後一組弐拾目宛、八代組之義海辺村数多、且奥山方等村ゝ廻り方壱人ニ而ハ弁兼候間、是迄之通四拾目御郡万造ゟ指出申度奉存候（伺）

一小枕御郡所御呼出者指添手代、組ゝゟ指出候而ハ、宿料等（ゝ）雑費多ニ相成、且中ニハ口書等急ニ出来兼候手代も有之、御用弁不宜義ニ付、先年小枕居住手代料銀、一組ゟ三拾六匁宛、都合三百六拾目組万造ゟ指出来候得共、以後相減、三百目御郡万造ゟ指出申度奉窺候

右組万造指止候様被仰渡候ニ付、是迄組万造ニ而取立来候品ゝ等取調理、以来御郡万造ゟ相渡候義詮義仕、御伺申上候間、御聞届可被下候哉奉窺候、以上

丑
七月

南善左衛門
島　孫　八
嶋村理三郎

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

15、嘉永六年「村万造之儀奉窺申帳」（折橋家文書（三）四六）

（表紙）

（朱書）「と」
嘉永六年八月
（朱書）「と」
（朱書）「下物」
村万造之儀奉窺申帳

（印）
嶋村
折橋
蔵書

射水郡

※表紙右上の○は朱書、蔵書印は朱印

一御蔵之御収納米斗手間并積賃
此儀斗人勤之品と奉存候（分）

一同運送舟賃
此分斗人と舟積米ニ割符可致義与奉存候

一御蔵納方之節、御蔵番人等之内江入込候茶代
此分以来指止可申義与奉存候、尤斗人と等無拠入込不申而不相成分ハ、其人とゟ指出可申義与奉存候

一同籾納下敷籾七合摺之図りを以、米ニ而相渡候分
此分以来五合摺之鉦ヲ以可相渡義与奉存候（征）

一御給人知米之内弐重皮代、村余荷ニ仕居候分
此分御給人様ゟ御渡可被成、品ニゟ候得共、相渡不申分有之方へ御渡ニ相成居申候村方ニ而ハ、右弐重俵出来方蔵宿へ引渡居御米壱石ニ付六・七十文、或ハ米ニ而壱升五合ゟ四升迄余内相懸、蔵町所ニ寄不同御座候、右弐重俵蔵宿へ引渡不申而者、猶余内多ニ可相成よし、依而已来ハ御給人様ゟ御知行入蔵宿へ上巻直ニ被仰談候事ニ可被成下、村方手を離レ候様ニ一統相願居申候、宜敷御詮儀可被成下候（弐重俵之分）（御人持様已上ニ御座候、其御給人様ニ而弐重俵ニ▨出来仕、弐重皮代料村（墨書）「若」

一伊勢初穂米
此分村余荷可致品与奉存候
（米方蔵指出候▨面割、可指出品与奉存候）

一石動山・二上山・立山初穂米
此分万造ゟ指出候儀ハ為相止、人とゟ指出候ハ格別之儀与奉存候

一右廻僧等宿料、村万造ニ相立有之分
此分不相当、右僧ゟ宿料取請させ可申与奉存候（村とニ而不及貪着品与）

一○古国府勝光寺（興）・井波瑞泉寺等仏供米（志）
此分人とゟ心次第可指出品与奉存候（義ハ格別与）

一組合頭料米之儀、村ニ寄米高取極引渡ニ相成居候分（年分）
此分組合頭之義ハ、御奉行所御廻并御扶持人才許村廻等（等）、定成御用之外、一日勤料米弐升宛相渡可然、尤人別江付候分ハ、其人とゟ為指出、且高方江付候分迠万造江相立可申、尤成限肝煎ニ而御用為相勤可申儀与奉存候

一村ニ寄用水普請等ニ人足仕候節、百姓中之内役人名代ニ罷出、料米請取居候分（遣）
此分成限肝煎罷出可申、尤料米取請不申、人足廻シ方手張候節ハ無料米ニ而▨親何人ニ而も罷出可申、且肝煎等外御用等ニ而右普請ゟ所江罷出兼候節も▨▨親順番ニ「壱人宛」為指出可（万一外御用▨指合、無拠御ハ組合頭罷出可相勤▨、料米之義弐升為相立可申候、且為相見）（朱書）

申奉存候　尤無料米ニ而為相勤可申儀与奉存候

一人足出方等都而村方入用之品ニ、是迄其村肝煎而已ニ而記置候分、　并人足米不同御座候

此分惣成者壱人米弐升宛ニ取極可然、尤右人足等都而村方入用之品、何方何ニ入用与申儀、其時ニ帳面ニ委ク記、圖親等相見届之印章為致置、右帳面を以年暮万造帳相仕立、割符為致可与申候奉存候

△一人足料米村ニ而不同有之候

此分壱人弐升宛ニ以来為相極可申与奉存候

一魚津并加刕改方等宿余荷、高・面ニ割分ケ居候村ニも有之、区ニ相成居申候　家割ニ相成候

此分人別江抱り候御用ニ候得者、其人ニ而為指出、其余之分ハ品ニ面割ニ為致可申奉存候　家・面方・家方

一村ニ祭礼ニ付油等入用高・面ニ而指出来候向等区ニ相成居候　割

此分家○・面割ニ可相成義与奉存候、且社堂普請等仕候節ハ、其村柄ニ寄り、高・面両方江も割分申向も可有御座奉存候　并往来筋村ニ宿余内高方江も割符仕候

一浪人者等とらせ銭、村余荷ニ相成居候分　高・面

此分村余荷為指止可申奉存候、且右浪人通筋宿建等ケ所宿余荷家懸之品与奉存候　面割

一乞喰等相煩候入用等

此分家○面割ニ可仕儀与奉存候

一村万造仕立候砌、百姓中寄合飯代等雑用

此分不相当、百姓喰通ニ中いたし、一切雑用懸申間敷奉存候、宿いたし候者薪代少ニ相立候義格別与奉存候

一村普請大工作料之義、村ニ寄飯代見込候分も有之、又作料之外、飯代別ニ相立候分も有之○、村ニ区ニ相成居申候　作料・飯代

此分ケ所ニ寄○少ニ宛高下有之品ニ付、已来飯代見込ニ而ハ引　村　作料　御坐候、且之義、以来壱飯ニ付四拾文宛ニ取極可申渡候

渡、作料之所圖親等示談、得与詮義之上引渡可申儀与奉存候

△一村ニ領内用水等普請ケ所百姓中之内江其ケ所ニ引渡、請負之姿ニ相成候分

此分請負之姿為指止可申、前ケ條通為相心得可申与奉存候

一組才許居在所を初、村役人等所ニ江罷出候御用之砌、暫御収納懸番之節等、宿飯代壱飯ニ付七拾文ゟ八拾文迄ニ而、村ニ区ニ相成居申候　其日切ハ握飯ニ而相弁候得共、居儀不申而不相成砌ハ

此分○以来壱飯五拾文宛与一様ニ取極候得者可然、尤泊り候得者夜具等代見込、壱人前四拾文為相渡可申奉存候

一才許居在所之内ニ組方村ニ役人等人込候ケ所、組宿与相唱、年中米代米与して、村柄大小ニ寄○弐・三斗ゟ六・七斗迄高方ゟ相渡居候分　江御用ニ罷出候節、組宿　村ニ役人等　入込余内　ニ　米

此分已来小村五百文、中村壱貫文、大村壱貫五百文、宿建等之ケ所ハ壱貫五百文ゟ猶小ニ弐貫文迄与相定、○家之多寡ニ寄精誠詮義仕、尤高・面ゟ為相渡可申奉存候　或ハ　方・家方

一御知行出百姓分ケ持参出府役人宿料等、区ニ相成居申候

此分一泊り三百文宛与取極、高方ゟ為相渡可申奉存候

一海辺川筋村ニ御普請方等守護之ため、伊勢御祓年ニ請来候分

此分雑費以来高・面ゟ取立させ可申奉存候　方・家方

一村ニ寄状持手間料相立有之分

此分村走り勤向ニ付指止させ可申、尤村走り居不申村方百姓順番ニ為相勤可申奉存候

一家割・面割之品ゝ、家数少キ高多之村方ハ、品ニ寄高方江も割合可致村方も可有御座、猶組才許ゝゝニ而得与詮義詰可致義与奉存候

（朱書）「下」一村ゝ万造帳調方区ゝニ而しらへ方も相混シ申ニ付、当年ゟ別紙横折案文通一様ニ為仕度奉存候、尤十一月切造村万造割（この部分の抹消のみ墨書）

符為致、十二月分ハ翌年之万造江為相立可申与奉存候

（朱書）「上」一村ニゟ万造ニ可立品、時ゝ割符取立候向も有之、是等ハ紛（材木等現銀買入之分ハ其時ゝ組才許之内、相）

（寛為致割符可申、見届を受）敷儀も御座候、尤万造帳之表征合も相訳り不申、以来時ゝ（致割符、年暮万造帳之表征合相訳り候様調置可）

申義与取立候儀為指止可申奉存候

右諸（村）万造調理方主附善左衛門等（私共）江被仰渡、先達而以来村ゝ帳面（米方・銭方万造）取立、夫ゝ相調理候所、不当之分多ク有之、尤区ゝ之取扱ニ相成居申ニ付、（相当品も御坐候ニ付段ヶ条書を以私共詮義之趣）凡之所先ツ前條之通為相心得可申与、私共示談之上、此段御窺申上候、猶（間）御指図可被成下候、以上

嘉永六年八（九）月

南善左衛門
嶋村理三郎
二口村十郎兵衛
作道村甚兵衛
斉藤庄五郎
島孫八

御郡
御奉行所
御改作

御奉行所

※本史料中の抹消・記号・傍線・行間の書込は全て朱書。

16、嘉永六年「宿立ヶ所万雑方之義ニ付奉窺申帳」（折橋家文書（三）四八）

（表紙）

（一五）

嘉永六年十二月

宿立ヶ所万雑方之義ニ付奉窺申帳

（印）

嶋村	折橋	蔵書

（異筆）「理三郎扣」

射水郡

※表紙右上の〇は朱書、蔵書印は朱印

（付札ハズレ）「本文人馬帳等年分指定候分万雑ニ可相立、併入用高大図り可書出候、且七木願等之類詮儀之通、其人ゟ取立可申事」

（付札ハズレ）「本文詮儀之通可相心得事」

一放生津町等宿立・町立之ヶ所御用宿余内之義、近年御郡所ゟ御取極被仰渡御座候

但当七月御用宿余内方ニ付御窺申上置候趣、御聞届被下候上ハ、宿立ヶ所等之義も同様可申渡義与奉存候

一筆墨料之義、ヶ所ニ寄過分万雑江相立御座候

但此分役人身出之品与奉存候

一料紙類

但料紙之義者、年分指定り候人馬帳・算用帳等、年暮万雑帳或ハ惣様江付、時ゝ書上物等入用紙之義者精誠省略仕、万雑江為相立、其余七木拝領願等之類人江付候料紙ハ、其人ゟ為取立可申候

一炭・蝋燭・油代

但年分過分万雑ニ相立居候向茂御座候、非常之節等相用候蝋燭之儀者精誠省略仕、万雑江相立可申候得共、炭・油之義ハ肝煎宅ゝニおゐて諸御用相弁候得ハ、不用之品与奉存候、夜番所相建有之所之義ハ、成限り省略之上万造江為相立可申義与奉存候

付札①

一放生津町等肝煎并日行司・町走り等料銀、七月・十二月両度ニ度ニ相渡、其外時ゝ入用之品等現銀払之旨ニ而、月ゝ銭才許ゟ取替相渡、右利足過分万雑ニ相立御座候

但肝煎等料銀之義、年暮相渡候得者可然、其内ニも現銀不払而不相成品組才許江相窺、指図請候上、其時ゝ割符取立候事ニ相成候得者、利足不相懸義与奉存候、併格別小銀ニ而割符も仕兼候程之分者、組才許ニ而詮儀之上、品ニゟ取替相弁させ候分も可有御座与奉存候

「本文(付札①)肝煎等料銀二季ニ相渡可申候、是迄銭才許ゟ取替相渡、利足相立候義不相当、以来利足相立不申事ニいたし可申候、時ゝ入用之品等現銀払ニ相成候分ハ、如何之ものニ候也」

一祭礼之節、神主宿入用

但其所長立候分限之者共順番を以宿為致候得ハ、別ニ余内ニ不及義与奉存候

付札②

一放生津町駅継等年分人足賃百五拾六貫文与定銭ニ取極、渡切ニ相成候、其上年ニ寄一作扱之名目を以、弐拾貫文斗ゟ三拾貫文斗迄別段相渡御座候、尤右ヶ所ニも不限是等ニ類候分

但請負渡切ニいたし候上、一作増扱相渡候義紛敷御座候間、以来ハ人足遣方精誠省略仕、年中人足遣帳を以御見届被仰付、万雑江相立候ハヽ可然与奉存候

「本文(付札②)人足賃銀之義、但書之通可然候事」

付札③

一伏木浦ニ而御台場砂除垣入用

但此入用ハ所方切押請之筋ニ而も有御座間敷哉、御郡ゟ償与欤、又ハ其時ゝ書上御渡可被下与欤、御詮儀之趣被仰渡可被下候

「本文(付札③)御台場砂除垣入用□押請いたし可申事」

付札④

一放生津町等日行司并物書・走り・番人等之類給銀之義、先年定入帳御見届之上取極り、年ゝ万造帳之表定(定)成ニ而相立居申候

但諸御用方并調筆方等肝煎・組合頭ニ而大体ハ相弁可申義与奉存候、然所日行司并物書等年分給銀過分ニ相見江、且走り給銀之義も家数多之ヶ所与ハ乍申、外ヶ所之割合ニ引競候得ハ惣而過分ニ相見江申候、右ハ先年御詮儀之上定入御押御印も被仰付置候品ニ付、別冊書抜御窺申上候間、尚更御詮儀可

被成下候

（付札④）「本文日行司并物書指止、肝煎・組合頭ニ而相弁可申事
但走り之義ハ成限り省略之上、書出可指図受候事」

一高岡瑞龍寺　御花松御伐出方与して、御郡所付山廻足軽中等出役宿方等守山駅ニおゐて相勤、右松伐出候村ゝ、上田子村等拾弐ヶ村ゟ壱ヶ村ニ付三百文宛余内、守山駅江請取居候分
但此分守山駅暨領付村ゝ切ニ而押請可仕筋ニ而無之、已来御郡余内与欤ニ可被仰付義ニ而も可有御座哉、尚更御詮儀之趣被仰渡可被下候

右射水郡宿立ヶ所等万造調理方被仰渡候ニ付、諸帳面之表夫ゝ相調理候所、不相当品ゝ等御座候ニ付、別冊万造帳扣ニ委曲下ケ札仕、前段ヶ條書を以私共詮儀之趣御窺申上候間、尚更御指図可被成下候、且先達而御伺申上置候ヶ條ニ相当り候品者別段御窺不申上候、以上

嘉永六年十二月

南善左衛門
嶋村理三郎
二口村十郎兵衛
作道村甚兵衛

（砺波・射水郡奉行）伊藤粂之助殿
（同）村安左衛門殿

（付札ハズレ）「本文非常之節等相用候蝋燭之義者、時ゝ才許手前江為書出可承届、夜番所入用之義ハ成限り遂省略、万造江可相立候事」

（付札ハズレ）「本文御花松伐出方ニ付余内方過分之様ニ相聞得候間、巨細ニ入用方可書出候、其上可致詮儀候事　」

（裏表紙朱書）「丑十二月廿四日、此冊御附札ニ而伊藤様・村様ゟ理三郎江御渡被成候ニ付、決算寄合中南等江申伝候、御付札本文南ニ有之事」

17、嘉永六年「射水郡組万雑指止、御郡万雑ニ而相渡候品々重而奉伺申帳」（折橋家文書（三）四九）

（表紙）

一五

嘉永六年十二月

（印）嶋村　折橋蔵書

（朱書）「四」
射水郡組万雑指止、御郡万雑ニ而相渡候品ゝ重而奉伺申帳

御扶持人

※表紙右上の〇は朱書、蔵書は朱印

付札①

一大袋組万造之儀、先達而諸郡窺帳ニ御付札通、右組高千四百石余之当御郡万造之割合を以取立、且荒屋村・四日曽根村家懸り之儀も外組ゝ振ニ為指出、其余放生津町・同新町江分限家割ニ仕候得者不同無之、尤御郡万雑調理方主附手前ニ而精誠取調理

割符方申渡、翌年正月別冊ニ書上可申候
「本文之通相心得可申事」(付札①)

一火事家灰除人足并出水取防人足之儀、御附札ニ村ゝ相互ニ候得ハ、訳而余荷ニハ及間敷与御座候、右ハ組ゝ之内三・四里相隔候村ゝゟも人足為出不申而者相互之事ニ相成、左候而者往返之費有之ニ付、近村ゟ多分為指出、御扶持人詮儀を以、其組切其川筋村ゝニ而余内為指出候得ハ、村ゝ為筋ニ御座候間、此段御聞届可被下候

付札②
「本文之通相心得可申事」(付札②)

一組走り給銀之儀、御付札之通、無組御扶持人方走りハ五拾目、組持者弐拾目之増ニ而可相弁候得共、組持御郡首座三拾五匁増ニ御聞届可被下候、組才許ハ組ニ寄格別御用多ニ而、是迄弐拾壱貫文迄も相渡来候、尤夜中暨深更之無指(差)別懸廻候ニ付、一昼夜四拾文之図を以年分拾四貫文以下ニ取極候得ハ、六貫文之減少ニ相成、尤是迄給銀少分之組者右ニ準シ、成限り減方可仕候、且又二組御用所壱ヶ所ニ有之分ハ、壱組者外組同様、一組ハ弐・三拾目増ニ而相弁可申候間、此段御聞届可被下候

付札③
「本文之通相心得可申事」(付札③)

一金沢ニ而寄合座料、一度ニ何匁与申儀可書上旨御付札ニ御座候、春冬者壱度ニ五匁、夏秋三匁充取極申度奉存候

付札④
「本文寄合席料之儀、尚更三郡同様相心得、追而何程与ゟ申儀可申聞候事」(付札④)

一相談所臨時寄合賄方入用之儀、人ゝ身出ニ可仕旨御付札ニ御座候、右者御用払ニ仕、残余内僅之儀ニ御座候得共、御郡惣様江抱(拘)り候御用ニ付、先前者御郡長立百姓中之内順番等を以寄合相談仕、人ゝ宿料・米代御用払仕候而已ニ而、其余御郡余内ニ相成申候、就中相談所出来、人ゝゟ米代指上候而已ニ而、賄方御郡余内ニ相成来候間、今度相改、賄料省畧仕、壱飯三拾三文充ニ取極、自身并下人共一日分六飯代百九拾八文ニ相成、其内米壱升五合代大綱七拾文図ニ而百五文、并宿料六拾文、都合百六拾五文御用払十村ゟ指出、残り三拾三文御郡余内を以取立之儀御聞届可被下候

付札⑤
「本文相談所余荷之儀、詮儀之通相心得可申事」(付札⑤)

一氷見庄鏡磨共、他国稼御過書并稼元縮証文暨帰案内書付飛脚賃等、并他国ニおゐて故障有之雑用等、且氷見庄等御収納方江現銀御払米等買入米方ニ付飛脚賃等諸雑用、并灘浦村ゝ猟方暨駒方等諸雑用之儀是迄向ゝゟ取立来申候、以後も是迄之通取立可申儀与奉存候

付札⑥
「本文之品ゝ無余儀分ニ而詮儀通承届候得共、飛脚賃抔者急度省畧之筋も可有之、成丈走りを相遣、少ゝ之余内相渡不相弁哉、篤与詮儀可有之候、尤其品ニ寄巨細帳致シ可相達候事」(付札⑥)

一放生津町御蔵屋敷ニ付添地面并下村(小杁)○備荒倉屋敷年貢米、且放生津・吉久御蔵雪下シ并放生津御蔵御門前垣結人足等雑用、小杁・下村備荒倉番人給銀、斗下村ゝゟ指出来候、是迄之通ニ可仕哉、又者御蔵付添屋敷引高ニ可被仰付哉、番人給銀諸郡打銀御渡、且吉久川下・御蔵雪下シ賃等御渡可被下哉

付札⑦

「本文(付札⑦)是迄之通斗下村ゟ可相勤候事」

一氷見御蔵朝日村領江転地被仰付、右地面引高ニ被仰付候処、合盛卸立米之内右引高定納口米引残壱石五斗余、斗下村ゟ余内指出来候得共不相当哉、以後如何相心得可申哉

「本文(付札⑧)以来余荷ニ不及候事」

一手代給銀之儀、御郡万造ゟ十村壱人ニ壱貫五百目取立可申、致不足候ハヽ、十村ゟ引足可申旨被仰渡、去年迄左之通

付	札			
	⑨			
		一弐百目	組方ゟ	壱番手代給銀
		一弐百目	主人ゟ	
		一弐百三拾目斗	御代官分増下敷三石三斗七升程代銀	
		〆六百三拾目斗		
		一弐百目	組方ゟ	二番手代給銀
		一弐百目	主人ゟ	
		一百四拾目斗	返上米増下敷弐石程代銀	
		〆五百四拾目斗		
		一弐百目	組方ゟ	三番手代給銀
		一百五拾目	主人ゟ	
		一百三拾目斗	籾納増下敷弐石六斗程代銀	
		〆四百八拾目		
		一六百目	雇手代并調筆人料銀平均中勘	
		合弐貫弐百五拾目		
		此内		
		六百目	組方ゟ	
		五百五拾目	主人ゟ	
		五百目斗	御代官分等納方手代増下敷、斗下ゟ取立候米等代銀	
		此分当年指止申候		
		六百目斗	組方ゟ取立候雇手代料銀等	
		〆		
		以後左之通被仰付可被下哉奉窺候		
		一七百目	壱番手代給銀	
		一六百目	弐番同断	
		一五百目	三番同断	
		一六百目	雇手代并調筆人料銀平均中勘	
		〆弐貫四百目		
		此内		
		壱貫五百目	御郡万雑ゟ	
		五百五拾目	主人ゟ	
		〆弐貫五拾目		
		残而		
		三百五拾目	不足主人ゟ弁銀	

右之通御聞届被下候得ハ、雇手代調筆人等料銀何程余斗相懸り候共、組才許身出ニ可仕儀ニ御座候

「本文(付札⑨)手代給銀、以後取極之儀越中三郡共一様ニ相成候様、外御郡可申合、尤組ニより手代両人位ニ而も可相弁与奉存候間、猶更今一往遂詮儀可申聞候事」

一御郡所惣代給銀之儀、五百目可相渡旨被仰渡候、小杁御郡所之儀、隔日・奇日共夜中迄も相詰、其上指懸り御用之節ハ及深更候而も御達方等御借屋等江罷出、烈敷相勤、雑費も相懸り申儀ニ御座候間、是迄御郡万造ゟ弐百目、壱組ゟ百目充、都合壱貫弐百目相渡来候儀ニ御座候間、五百目之外、賄雑用之方江三百六拾目増方御聞届可被下候

「本文惣代指止、御郡御扶持人等之内子弟弐人斗相撰、諸御用為見習指出相弁可然、尤飯代等ハ御郡余内ニ而可指出候事」（付札⑩）

付札⑩

一料紙代之儀、左之通仕切銀ニ仕度奉伺候

下倉垣組・上倉垣組・下東條組・西條組・南條組

五組一組分

六丸　中折上中下

代百八拾六匁　但平均壱丸三拾壱匁図

七束　徳田紙

代拾九匁六分　但壱束ニ付弐匁八分図

六千枚　鼠半紙

代六拾目　但千枚ニ付拾匁図り

〆弐百六十五匁六分　一組仕切銀

此外上東條組・二上組・上庄組・八代組、此四組者料紙余斗入用ニ付一組分中折紙壱丸代三十壱匁、鼠半紙千枚代拾匁相増、都合三百六匁六分ニ仕切申度奉存候

「本文料紙渡方之儀ハ追而可指図候」（付札⑪）

付札⑪

一惣代役人日懸料銀者、飯代是迄組万造ゟ指出来候得共、已後其村ゟ為指出、御郡余内指止申度奉存候

「本文詮儀之通可相心得候事」（付札⑫）

付札⑫

一組廻り藤内給銀四拾目余迄も組万造ゟ相渡来候、以後廻り藤内壱人給銀弐拾目充、且海辺村ゝ并奥山方等村ゝ廻り方壱人ニ而ハ弁兼候間、両人相立置、給銀精誠詮儀仕、組ゝ見斗、御郡万造ゟ取立可申与奉存候

「本文之通承届候事」（付札⑬）

付札⑬

右組万造指止、御郡万造ゟ相渡候品ゝ、当七月諸郡窺帳ニ御付札御渡ニ付、尚更私共示合、射水郡切之品ゝ重而奉伺申候、此節取立渡方指懸り申儀ニ御座候間、早速御指図被成下候様奉願上候、以上

嘉永六年十二月

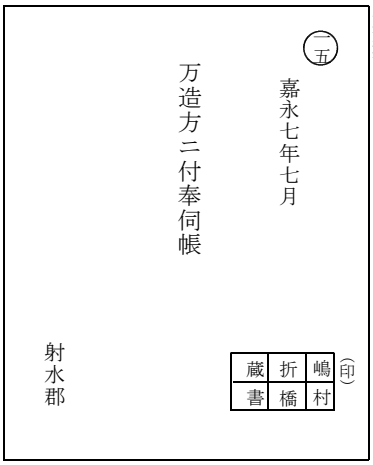
島　孫　八
嶋村理三郎
斉藤庄五郎
南善左衛門

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

（裏表紙朱書）
「本文ハ南氏ニ有之事」

18、嘉永七年「万造方ニ付奉伺帳」（折橋家文書（三）五〇）

（表紙）



※表紙右上の〇は朱書、
蔵書印は朱印

万造方ニ付被仰渡之趣有之、去十二月射水郡ゟ御窺申上候ヶ条之内、御附札を以詮儀方被仰渡取極り不申分、重而左ニ御窺申上候一手代給銀之儀、越中三郡示合、重而御達可申上旨被仰渡候、右者十村壱人ニ手代給銀壱貫三百目宛御郡ゟ取立、其余主人ゟ引足相渡申度奉存候、先達而十村壱人ニ壱貫五百目与申者、石川・河北両御郡之儀ニ而、遠御郡之儀者御詮儀之趣有之旨被仰渡候ニ付、右之通奉願候、尤是迄も五百五拾目主人ゟ引足申儀ニ御座候間、尤已来も引足可仕儀ニ御座候

一首座之外ニも御扶持人之儀ハ御用多ニ御座候間、壱人江手代増給銀弐百五拾目宛御郡ゟ取立申度旨去年奉窺候所、御聞届難被成旨被仰渡候得共、組御用迚ニ而ハ無御座候間、御扶持人壱人江弐百目宛取立候儀御聞届可被下候

一惣手代指止候而ハ、御用状・飛脚取次等指支申候間、是迄通被成置可被下候、且惣手代給銀五百目ニ被仰渡候得共、其外飯代も相渡不申而ハ迷惑仕候間、一日壱匁宛、都合年分三百六拾目別段御郡ゟ相渡申度奉存候

一御郡所惣手代指止、御扶持人等子弟之内為相詰、御用為見習、其内御用立候者ハ時ゝ御達可申上、飯代ハ御郡ゟ取立可申旨被仰渡候、射水郡ニ而者当春ゟ詰番被仰渡、子弟相詰候而も口書等急ニ手馴不申ニ付、手馴候迄ハ御用弁遅ク、御詮儀物日数ニ相成候而ハ却而迷惑可仕候間、右之通奉願候

一十村料紙去年精誠書上候儀ニ而、是上減方無之、去年書上候分ニ而も、右銀高ゟ余斗之分十村ゟ相弁申儀ニ御座候間、当分去年通被仰付置可被下候

一番代方御用紙御役所ニ而遣候分ハ代銀御郡ゟ取立可申、番代宅ニ而遣候分ハ才許ゟ相渡候様、去年砺波郡江被仰渡置候得共、番代宅ニ而遣候料紙之内、何程ハ何組当り与申儀取調理出来不申候間、精誠之所矢張是迄之通御郡余内被仰付可被下候

一御扶持人人ゝ方ニ而御用紙代、是迄仕切銀ニ相成候得共、已来精誠相しらへ、入用之紙代御郡ゟ取立申度奉存候

一首座ニも不限、御扶持人出府等之節、手代も召連候而も、指懸御郡引集書物仕物書相雇候分ハ其品書分、御郡ゟ雇銀取立申度奉存候

一寄合席料之儀、夏三匁、冬五匁与取極候趣、去年砺波郡ゟ御窺申上、御聞届之通取極申度奉存候

一御郡所并組ゟ飛脚賃之分、十一月晦日迄ニ而取しらへ仕、十二月
万造割仕度奉存候、十二月朔日ゟ晦日迄迫(衍)之分ハ調達を以相渡置、
翌年万造ニ而取立申度奉存候
右諸郡相談仕候上、御郡切右ヶ条ゝゝ奉伺候間、御聞届被下候様奉
願候、已上
寅七月　斉藤庄五郎
南善左衛門
中田村源五郎

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

覚

草高百石ニ付　御郡万造中勘打銀
一弐拾五匁
右同断
一六匁弐分　定検地出合打銀

〆
右当暮御郡万造等打銀如此御坐候間、組ゝ御取立、当十日迄小枕相
談所江無間遅御指出可被成候、先ゝ急速御廻、納ゟ御返可被成候、
以上
酉十二月七日　斎藤　南　折橋　高嶋
小嶋与右衛門様等

覚

一三百目　番代一作増
一弐百目　手伝弥一郎一作増
一百五十目　同直次郎一作増

〆六百五十目
右米価高直ニ付、格別之趣を以両御郡所(役カ)江御願申上候処、右之通御
聞届ニ候、仍而右銀高当盆渡候分、其許(ゟカ)江相渡置可被申候、以上
申七月十一日　御扶持人
番代五左衛門殿

番代并手伝之人ゝ米価高直ニ付、給銀方別紙願小紙御付札を以御聞
届ニ付、番代江取替渡方之義、別紙之通銀高書記相渡置申候、御承

19、文久元年「御郡万造方品々留」（折橋家文書（三）五三）

※表紙右上の〇は朱書、
蔵書印は朱印

（表紙）

〇五　文久元年ゟ

御郡万造方品ゝ留

折橋

嶋村（印）　蔵書
折橋

知置之様仕度奉存候、直次郎分日割とも心附候得共、不便之至ニ付、
五十日減ニして銀高取極申義ニ御坐候、尚更懸御目可申上与奉存候、
当暮万造入▨相成申義御留入置被下度候、以上

申七月十二日　　五十嵐孫作等

斉藤庄五郎様等

御郡所詰手代幸蔵義去年病死仕候ニ付、右代り新七義他三吉江申渡、
且近年御郡所御用多ニ付、今井屋太三郎義定雇手代ニ仕、給銀之義
ハ幸蔵渡り七百目之分右両人江半ヶ宛相渡申度旨等、去年御達申上、
御聞届被仰付置候、然所他三吉義格別御用烈敷相勤、給銀三百五十
目迄ニ而ハ甚以難渋仕、増方之義歎聞申ニ付、猶詮義仕候義相遠も
無御坐ニ付、私共示談仕候ハ右他三吉義故幸蔵代り詰手代申付置候
上ハ、早竟給銀七百目可相渡筋ニ御坐候得とも、一時ニ右給銀相渡
候義ニ而も無御坐候ニ付、当暮之処三百五十目之外、弐百目増方仕、
都合五百五十目相渡申度奉存候間、此段御聞届被下候様小紙を以御
達申上候、以上

申十二月　　五十嵐孫作等

今村五郎兵衛様等（砺波・射水郡奉行）

付札

本文之通承届置候事

申三月　　今村五郎兵衛印

覚

一三百目　　番代一作増

一弐百目　　手伝弥一郎
　　一作増
一百五十目　　同直次郎
　　一作増

〆六百五十目

右米価高直ニ付、格別之趣を以両御役所江御願申上候処、右之通御
聞届ニ候、依而右銀半高当当（衍）盆渡之分、其許ゟ相渡置可被申候、以
上

申七月十一日　　御扶持人

番代五左衛門殿

覚

一七百目　　給銀
　用水方造用ゟ
　用水仕法銀ゟ
　百目
　此内
一弐百目　　番料
一三百六拾目　　小遣料銀
一五拾目　　雪下并
　　垣結
一拾匁　　すゝ払方

〆壱貫三百弐拾匁

右之通来年ゟ相改候間、人別之義相定可被申候、以上

申十二月　　御扶持人

相談所詰

他三郎殿

私共召仕候番代等給銀之義、安政元年御取極被仰渡置候処、近年米価等高直ニ而難義仕候旨歎聞申ニ付、願之趣申上候処、去年之処ニ而一作番代壱人江三百目宛増給銀御聞届ニ御坐候、且番代手伝之義も同様歎聞申ニ付、去ミ年・去年両年共、一作壱人江弐百目宛給銀相渡候義御聞届ニ御坐候、就夫当年之処米価も格別引上、何れも難義至極仕候間、番代壱人江三百目宛、手伝壱人江弐百目宛、当一作増給銀御郡万造銀之内を以相渡申度奉存候間、此段御聞届被下候様奉願上候、以上

申七月　　北村与十郎等

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

表書願之通、当一作承届候事

御郡奉行印
改作奉行印　印印

番代并同手伝一作増給銀願小紙、今日御達申上候ニ付、為御承知別紙相廻申候、納ゟ御返可被成候、以上

七月八日　　得能

諸郡
御扶持人中様

覚

高五百目之内
一弐百五拾目　　一作増半銀
高六百目之内
一三百目　　手伝両人分一作増半銀
〆五百五拾目

右之銀子相渡申候、以上

酉七月十一日　　南善左衛門

番代
五左衛門殿

追而当暮万造割迮之処、振替置候義ニ候、以上

御郡ミ番代并番代手伝増給銀之義、別紙小紙御達申上候義御承知之通御坐候処、御聞届之旨御附札を以被仰渡候ニ付、相廻申候間、夫ミ御談可被成候、御本紙ハ諸郡箪笥之内ニ仕抹置候ニ付、写仕相廻申候、以上

酉七月十日　　得能覚兵衛

諸郡
御扶持人中様

覚

一五百目宛　　能美郡等番代八人江当一作増給銀奉願候
一三百目宛　　能美郡等手伝拾六人江当一作増給銀奉願候

右番代并手伝共近年諸色高直ニ相成、渡世方行詰迷惑仕候ニ付、去ル未年ゟ番代江三百目、手伝江弐百目宛一作宛増給銀奉願、御聞届之上、御郡ミ万造ゟ相渡来申候、然所去年以来別而米穀等諸品格別

高直ニ相成、いつれも難義仕候義相遠も無御座候、就夫番代ゟハ七百目、手伝ゟハ四百目宛増給銀相渡呉候様願聞候へ共、私共示合、精誠前段之通取図り御達申上候間、当一作右銀高御郡ゝ万雑ゟ取立可相渡奉存候間、此段御聞届被下候様仕度、小紙ヲ以奉願候、以上

酉七月　　北村与十郎等
　　諸郡御扶持人
　　首座九人

御郡
　御奉行所
　御改作
　御奉行所

御付札

本文願之趣格別之詮義を以、今度之義ハ一作承届候、併此以後ハ一切難承届候ニ付、此段予而申渡置候条、得其意、尚更番代共等江分而可申渡置候事

酉七月八日　　御郡奉行印
　　改作奉行印
　　印印

覚

一百八拾匁　中折半紙等類
　但一日五分図り
一百弐拾六匁　蝋燭
　但一日壱丁ならし
　年中六貫目、炭四十八俵、一ヶ月四俵ならし、
一百弐拾匁　壱俵ニ付弐匁五分運賃とも
〆四百廿六匁

右御郡所御詰番所年中御入用之紙等、是迄御相談所ゟ御入用之時ゝ御請取被成候得共、右ニ而ハ御不益之筋も可有之哉ニ奉存候間、以来右銀高ニ而御詰番所へ御引受被遊候得ハ御都合も宜敷、私共ニ而厳重仕抹いたし可申義ニ御坐候、左候得ハ御不益之筋も無御坐哉ニ奉存候、御仕法前ハ料紙御入用御仕切銀正敷三百六拾匁御渡ニ相成候哉ニ覚居申候、其節ハ御詰番様も御詰合無御坐、当時御詰番様御詰被遊候義ニ而、料紙等入増申義ニ御坐候間、右銀高ニ而御詰番所へ御引渡被遊候ハヽ可然奉存候、此段小紙を以御窺奉申上候、以上

酉六月　　御郡所詰番
　　新七等

御扶持人中様

付札

詰番所入用之紙・蝋燭・炭、是迄相談所ゟ其時ゝ渡来候得共、仕抹方も不行届ニ付、其許中受負ニ被致候ハヽ省略ニも可相成旨被願聞、夫ゝ示談之上、願通四百廿弐匁ニ而年中受負ニ申付候間、来春ゟ右之手配ニ可有之候事

酉十二月　　御扶持人
　　新七殿
　　新六殿
　　太三郎殿

忰中年分詰番料銀ハ、是迄之通定銀壱人江五拾目宛御渡可申、且十

二月・正月・二月此三ヶ月者仲間一統出府等ニ而、詰番出来不申ニ付、右三ヶ月之間ハ悴中被詰候日数を以、一日三匁宛料銀御渡申事ニ当暮ゟ取極候間、去十二月ゟ当正月・二月分此度銀高御渡可申候、当十二月ゟ来正月・二月分ハ来戌年暮料銀操(繰)ニ年ゟ御渡可申事ニ取極候事

辛酉十二月九日　　寄合

覚

一四拾三匁　　五歩市屋
　　新四郎

右者詰番所江取立銀等、是迄不仕抹之儀も有之ニ付、当春已来示談之上、右新四郎江其時ゟ仕抹為致候事ニ取極候ニ付、年分為世話与毎歳如此御郡万造ゟ立渡申候事

酉十二月十日　　寄合

覚

一壱貫目　　十組手代共へ南氏ニ而取替

右拝借願之通貸渡候間、無利足を以来戌之十二月中返済可有之候、以上

酉十二月十日　　寄合

覚

一弐拾壱匁五分　　下倉垣組
一四拾五匁六分
〆六拾七匁壱分
一拾九匁三分五厘
一三拾三匁六分三厘
〆五拾弐匁九分八厘
一弐拾目三分五厘
一四拾八匁壱分六厘
〆六拾四匁五分壱厘
一弐拾五匁
一四拾五匁
一三拾壱匁八分
〆百壱匁八分
一拾五匁四分壱厘
一拾八匁四分
一五拾目
一四拾五匁壱分
〆百廿八匁九分壱厘
一六匁四分
一三拾四匁七分弐厘

高提灯張替并火消道具修理代
同組出火之節用蝋燭代
上倉垣組
高提灯并弓張提灯張替賃
同組出火用蝋燭代
下東條組
高提灯并弓張提灯張替賃
同組出火用蝋燭代
上東條組
高提灯并弓張提灯張替賃
同組〇出火用蝋燭代
同組火消人足看板・笠等出来代
二上組
高提灯等張替賃
同組御用状箱出来并損候分直シ候入用共
同組火消人足看板并笠出来代
同組出火用蝋燭代
西條組
高提灯并弓張提灯張替賃
同組出火用蝋燭代

〆四拾壱匁壱分弐厘　南條組
一拾六匁　高提灯張替賃
一四拾八匁四分四厘　同組出火用蝋燭代
〆六拾四匁四分四厘
一拾弐匁三分五厘　上庄組
高提灯張替賃
一弐拾七匁　同組出(火)消人足看板并笠修覆代
一拾八匁五分弐厘　同組出火用蝋燭代
〆五拾七匁八分七厘
一六拾壱五分　八代組
高提灯并火消道具修覆代
一三拾六匁四分　同組出火用蝋燭代
〆九拾七匁九分
惣銀合
六百八拾目六分三厘
一拾弐匁五分　大袋組
火消用蝋燭代
一拾匁四分壱厘　同組高提灯張替賃
〆弐拾弐匁九分壱厘
右射水郡下倉垣組等九組出火之節用蝋燭代等、前段銀高当暮御郡万造江相立候義、且大袋組分組割符を以当暮取立候義、御聞届被下候様仕度、小紙を以奉願候、以上

酉十二月　斉藤庄五郎
等四人

御付札

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

本文之趣承届候事
酉十二月　御郡奉行印
改作奉行印

覚

一百目　吉久新村
仁兵衛
右御代官方等ニ付何ヶ骨折ニ付、料銀与して相渡候事
辛酉十二月　御扶持人

覚

一九拾弐貫六拾八匁三分四厘　用水打銀
受取高
内
三拾弐貫三百目　藪役銀当月上納銀引
七貫目　上庄組当り用水銀之内中勘、同組現銀御払米方へ為替引
拾貫目　定検地所江上納銀引
○弐百九拾匁(々)目　右同断年賦銀、諸方上納銀引
○四匁壱分八厘(ごご)　右十一月上納弐ヶ月利足
三貫目　外国方ニ付六貫目之分弐ヶ年賦返上銀引
壱貫四百九匁　右同断拾ヶ年賦返上銀引
弐分四厘　上条前江御改所(ママ)ゟ拝借銀之半銀上納銀引
●四貫八百五拾目

○四百五拾五匁八分六厘
外国方他国聞合路用金等元利并
真長寺御祈祷料諸郡割、去申十二
月渡り元利、此内巨細書上候分引

○六百八拾三匁九分三厘
春日社日御取花并宗門帳印章、暨
当七月渡諸郡料紙代当り、上京人
橋留方今江宿余荷諸郡割、此間巨
細書上置候分当七月渡元利

○四百拾七匁七分五厘
水路八ヶ余荷米
諸郡割、此間書上候分

○四百拾匁三分四厘
大豆方諸郡割、此間書上候内

〆六拾貫七百四拾目三分　上納銀等為替銀引
残而　三拾壱貫三百弐拾八匁四分厘　銀上ル

右用水銀請候銀高之内上納銀等為替引去残り、右銀高三拾壱貫三百弐拾八匁四厘、今日飛脚を以取ニ被下、則指上ケ申候間、御受取可被下候、猶相届候段重而御序之節御しらせ可被下候、以上

酉十二月十五日　番代　五左衛門

斉藤庄五郎様　南善左衛門（ママ）
折橋理三郎様　高嶋庄右衛門（ママ）

嶋村九郎兵衛富山江春来
▨組手代ゟ
一壱貫目
詰居候処、不時造用相懸候由
ニ付、御郡ニ而取扱与して渡り銀

右ハ南氏ニ而振替、十二月十七日至来之事

覚

一拾壱貫目　通用銀
内六貫三匁壱分三厘　用水方渡り銀ニ而立用
四貫九百九拾六匁八分七厘　正銀今日受取

〆

右御郡万造方へ調達銀、今日御指越、前段指引書之通受取申候、且用水方渡り銀立用之分ハ猶更南江申遣、追而受取候上ハ、改而御扶持人連名証文御渡可申候、依而仮証文相渡之申候、以上

辛酉十二月廿二日　折橋理三郎
開発屋
六兵衛殿

諸郡万雑銀〆高、安政四年分ゟ文久元年分まて取調理、急速不書出（可カ）候事

右御覚書今村様ゟ御渡ニ付、為持進候間、運速（ママ）御達被下度候、以上

戌三月廿七日　小杁御郡所詰番
折橋理三郎様

去申年御郡雑用書上帳別冊、今村様ゟ御渡、右帳面之内御附札之口〻前以御伺有之哉、尤御指図之有無共御しらへ、委細御答御座候様、貴所様迄得御意可申様御談ニ御座候間、御取しらへ、早速御達被下度候、以上

戌三月廿七日　御郡所詰番
二口七郎兵衛
折橋理三郎様

覚

一五百目　去ル申年　飛騨守（大聖寺藩主前田利鬯）様小杁新町御泊り、其節御宿文七郎方不時人足等余斗相懸候ニ付、御郡ゟ一作償渡

一弐百弐拾目　御郡用水方造用之内江一作余内渡

一三拾目　相談所寄合之砌、飛脚触次之者詰切相勤候ニ付一作余内

一百目　相談所番人他三郎料銀一作余内

〆

右去ル申年御郡万造本勘取調理、去暮帳面御達申上候処、前段四口之分前以御窺申上、御指図請候分ニ候哉与御尋之趣奉得其意候、右四口一作償渡之分同年暮万造しらへ之刻、御窺可申上筈ニ御座候所、決算寄合中何廉繁多ニ罷在候内、不斗取洩、御窺可申上所江も心附不申候、右四口之分何卒御郡万造ゟ一作償渡候儀御聞届被成置被下候様奉願上候、前以御窺不申上儀、今程私共不念之仕合奉恐入候、何分宜敷御詮儀被下候様、小紙を以奉願上候、以上

戌
四月

斎藤庄五郎
南善左衛門
折橋理三郎
高嶋庄右衛門

今村五郎兵衛様
金子篤太郎（砺波・射水郡奉行）様

本文万造償願之儀ハ前窺可請指図所、其儀無之、去暮調理之砌取洩候与申儀不相当、早竟調理方混乱之基ニ候、乍去今程深ク遂穿鑿候而者迷惑之趣ニ付、今度之儀者先ツ是切ニ聞置、右四口銀高当一作御郡万造を以償願之通り承届候条、得其意、就右万造方近年追〻致増長居、尤其許中ニおゐて油断者有間敷候得共、猶更以来精誠取しらへ、予而申渡置候通貫通いたし候様、厳重可相心得候事

戌
五月三日

今村五郎兵衛

御郡万造銀〆高、安政四年ゟ文久元年迄之分取調理注進可申上旨被仰渡、奉得其意候、文久元年分万造之義者当七月本勘打銀取立候上ならて、銀高書上出来不申儀ニ御座候、依而万延元年前五ヶ年分万造銀高取調理、別紙ニ書上申候、且安政三年ゟ年〻銀高相増居申ニ付、一ヶ年切不時渡り之品〻相しらへ、両様共別冊御達申上候、以上

戌
四月

斎藤庄五郎
南善左衛門
折橋理三郎
高嶋庄右衛門

今村五郎兵衛様
金子篤太郎様

覚

一九貫目　御郡万造方江調達銀高

此利　去十二月ゟ
七百五十六匁

六月迄之利足

〆
九貫七百五十六匁

此方江
五貫目　今五日進申候

右御郡万造方江去暮調達銀元利之方江今日銀五貫目為持進候間、請取書可被進候、残銀高集候次第、明朝ニ而も可進候、以上

戌
七月五日　南善左衛門
不在合
折橋理三郎印

大門新町開発敷屋
六兵衛殿

覚

一四貫七百五拾六匁　通用銀

右銀為持進候間、請取書可被進候、去暮万雑方へ調達元利是而相済候間、証文被相返候様いたし度候、以上

戌
七月七日　南善左衛門
不在合
折橋理三郎

大門新町開発敷屋
六兵衛殿

新田才許中等溜詰所之義、何欤不取縮之儀も有之様ニ及見聞候、右溜詰所之義ハ新田才許等罷出候義稀ニ有之、多分者明居候ニ付、格別縮置不申而ハ不相成、第一戸縮厳重ニいたし、錠鍵等各中手前ニ仕抹置、猥りニ出入不致様相心得可申(被)候、是迄多分水上屋次郎左衛門引受仕抹いたし居候体ニ候得共、同人義食事賄方引受居候迄之義ニ而、其外同人ニ抱(拘)申義ハ無之訳ニ候間、其心得を以右溜り詰所(ママ)年根葺替或ハ畳表替等、都而造用方各中手前ニおゐて成限り省略いたし、尤其品新田才許等江相伺、拙子共江も可申聞候、前段之趣新田才許中等江も拙子共ゟ申達置候間、左様相心得取縮方無油断可被相心得候、以上

八月　南
折橋
高嶋

手代
宗八殿等
二塚村
藤右衛門殿

小杁新町高木屋茂兵衛御郡所飛脚引受相勤居候ニ付、毎年御郡ゟ之義ニ付願書付
弐百目取扱銀〇付札左之通り

本文御郡ゟ弐百目取扱銀之内百目上納可有之、残り百目格別之趣を以願之通り用捨之義承届候事

亥十二月　御扶持人

覚

一百目　一作増給銀

右当年諸色高貴之折柄ニ付、当一作増方之義御願申上、相渡之申候、
以上
亥
十二月廿八日　南　折橋　高嶋　作道
手代
仁左衛門殿

覚
一百目　当一作増給銀
右同文言
亥
十二月廿八日　南等四人
手代
新七殿

覚
一百目　当一作増給銀
右同文言
亥
十二月廿八日　南等四人
手代
新六殿

覚
一七拾目　一作増給銀
右同文言
亥
十二月廿八日　南等四人
手代
太三郎殿

去ル酉年附越米欠立ニ相成、右上納方江拝借銀五百目之分、戌年ゟ年賦上納可仕所失念仕、何共申上訳も無御座、御用捨被成下候様奉願上候、右拝借願上候節、無利足ニ而拾ヶ年賦を以上納可仕旨御聞届被成下、則御聞届物所持仕候、依而昨今両年分百目上納仕申候
一是迄越御代官分壱冊ニ弐拾目被下銀御指止、以来為御給銀毎年弐百五拾目宛可被下旨、去酉十二月十五日御紙面を以被仰渡、銀子頂戴仕候、右銀子之内を以壱冊ニ拾匁宛御算用料番代江可相渡旨被仰渡候ニ付、百五拾目番代江指遣候所、私ゟ御算用料可取請筋無之旨ニ而指戻シ申候、然者去戌五月右番代渡之分御扶持人中様ゟ御渡可被成ニ付、可指上旨御紙面を以被仰下候ニ付、同五月十六日御扶持人中様御名宛ニ仕指上申候、且又去戌年暮右御給銀も御渡無御坐ニ付、何ぞ御詮義之筋も可有御座哉与指扣罷在、当春已来も御伺申上度存罷在候得共、御難題之御儀奉恐入、指扣罷在申義ニ御座候、依而当年分百五拾目上納仕申候
右等之趣ニ御座候間、猶更宜敷御詮義被成下候様奉願上候、以上
亥十二月　納手代　吉作
御扶持人中様

覚

一百目　手代𠮟作ゟ年賦銀

右之銀子指出申ニ付送り上申候、此間御申越之趣申入候処、別紙小紙指出、何ヶ間逮之事も有之様子ニ御座候間、来春御出府之上得与取しらへ候ハヽ可然奉存候間、其御手図被成置可被下候

一弐百目　𠮟作へ可渡料銀

右被遣相渡、別紙受取書出申ニ付送り上申候、一巻へ御入置可被下候

一百五拾目　𠮟作ゟ指出御算用料拾五冊分

右銀子当年分全有之ニ付、番代江相渡申候、去年・去ゝ年分之義𠮟作小紙之表ニ而ハ、御郡ニ而も手洩之義も有之様ニ相見得申候、来春得与取しらへ、出方之所取極、いまた不渡分ハ番代へ渡候方取極申度奉存候、いつもいそかしくまゝ中かん之取しらへニ成候故、来春ハ御互寄合之節ニ而も𠮟作手前穿鑿之上、重而之事も手堅ク極置候ハヽ可然奉存候、別紙小紙等来春御出府之節御持参之事ニ被成可被下候

右之趣得御意度、早ゝ如此ニ御座候、以上

亥十二月廿六日　自金沢　南善左衛門

折橋理三郎様等三人

覚

六月

一弐百弐匁　新流木筒拾丁并ニ駄賃共

此利拾四匁壱分四厘　七ヶ月

六月

一弐百弐拾四匁四分　調練装速(束)・帷子・袴七人前代

此利拾五匁七分壱厘　七ヶ月

元利〆四百四拾目五分弐厘

右当六月御互初子息中着用之調練装速(束)等出来代銀、番代ゟ書出申ニ付、銀子振替渡し置申候、右代銀出方御相談置可被下候、木筒も人ゝ方江遣置之分、尚更御しらへ置被下度、私方当り抔も無之様ニ御座候、且装束も覚之助殿抔へハ渡り居不申様ニも承り居候、尚更御しらへ置可被下候、以上

亥十二月十一日　南善左衛門

折橋理三郎様等三人

小杁御郡所并組ゝ等御用飛脚相勤候者共、近年諸色高直ニ而、別而金沢表等宿賃殊之外高直相成、最早勤向兼迷惑仕候旨ニ而、賃銀増方之義昨年已来相歎居申候、右諸色高価ニ而、是迄之定賃銀ニ而ハ引合不申義、相遁も相逮も無御坐候ニ付、私共示談仕候ハヽ、是迄之定賃銀ニ壱割半増方相渡、且宿賃之義も一体相増候義ニ而も有御坐間敷、金沢泊り賃之分丈一宿分五拾文宛一作増方相渡申事ニ仕度奉存候

一小杁御郡所日懸小使之義、是迄一日壱両宛雇料銀御郡万造方ゟ渡来申候処、前同様壱両五分ニ而者勤兼迷惑仕候旨相歎申義ニ御坐候、是も無拠歎ニ御坐候間、定銀壱両之外、一日三分宛一作増方

相渡申度奉存候
右之趣相伺申上候間、一作増方之義御聞届被下候上ハ、指懸処調達相渡置、当七月万造本勘渡之処ニ而立渡申度奉存候、右小紙を以奉伺候、以上

子二月　南　折橋　高嶋
作道

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

覚

一拾三貫百壱匁壱分六厘　御通雑用
但転(伝)馬高拾五万三千五百七拾弐石六斗七升八合、割ハ高百石ニ付八匁五分三厘壱毛宛

内
壱貫九百九拾　上倉垣組　壱貫四百八拾四匁九分　下倉垣組
三匁五分三厘
六拾目六厘　大袋組　壱貫七百五拾五匁三分弐厘　下東條組
壱貫四百四拾　上東條組　壱貫七百拾九匁　二上組
六匁八分八厘　四分七厘
九百廿四匁四分三厘　西條組　壱貫四百三拾壱匁　南條組
四分二厘
壱貫三百五拾目　上庄組　九百三拾四匁四分五厘　八代組
八分弐厘
〆

右去夏以来
御守殿様御等時ゟ御通行之砌、小枩新町・下村両駅ニ而御宿方并人足余荷銀、且御両殿様伏木浦御軍艦御覧之節、御乗舩雑用等償相願申ニ付、夫ゟ御達申上、御聞届ニ相成申ニ付、前段銀高割符仕候間、急速夫ゟ御申渡御取立、当十五日切私方江無間遅御指出可被成候、此状先ゟ御廻達、留ゟ御返可被成候、以上

子四月三日　南善左衛門
折橋理三郎様等拾人

覚

一拾弐貫百六匁八分　銃卒人飯代造用
内
六貫目　御渡方奉願候
六貫百六匁　御郡家割ニ而取立申度奉存候
八分
〆

右去夏已来小枩・放生津・伏木ニおゐて、御郡村ゟ銃卒稽古被仰渡候ニ付、右稽古人共飯代之義ニ付、其節被仰渡之趣も有之、人ゟ身出之事ニ詮儀も仕候得とも、左候而ハ稽古出人進ニ相成不申、且ハ組ゟ出方不同御座候而、御郡一体之詮儀ニ振候処も御座候ニ付、去暮右銃卒人飯代御郡村ゟ家割を以取立申度、其段奉伺候処、右ニ付猶御儀義(ママ)之品も有之、先調達相弁置候様被仰渡候ニ付、私共手前ニ而夫ゟ弁方仕置申候、就而ハ右惣銀之内半銀六貫目御役所ゟ御渡被下間敷哉、左候得ハ残半銀六貫百六匁八分御郡家割を以、当七月本勘打銀取立申度奉存候間、何分宜敷御詮儀被仰付被下候様仕度、

此段小紙を以奉願上候、以上

子五月　　南　折橋　高嶋　作道

今村様
（丈之助、砺波・射水郡奉行）
中川様
（半四郎、砺波・射水郡奉行）
青地様

近年田方江桑植付候もの多有之哉ニ相聞へ、以之外之事ニ候、五穀を廃し、蚕を専一致し候而者不可然候間間、（衍）地江植付候志当然之義ニ候得共、田方ハ勿論、畑方等江新規ニ桑植付候儀ハ決而不相成事右之通御料・私領・寺社領共不洩様可被相触候

右之趣可被相触候

四月

御郡所添御紙面略ス

諸郡番代并手伝、石川・河北御郡組ゝ手代共増給銀之義願出申ニ付、私共ニ而重ゝ詮儀仕候処、諸色高直之上、近来御用も多、何も烈敷相勤候而、雑用相懸り候義相・も無御座、是迄番代等給銀増奉願候処、安政五年以来御聞届ニ相成居候得共、去ゝ年格別被仰渡も御座候ニ付、去年之所私とも手前ニ而打返詮儀之上、番代壱人五百目宛、手代并手伝壱人江三百目宛増給銀奉願候処、願之通御聞届ニ御座候、然処春来別而諸色高直ニ而弥増雑混（ママ）仕候趣重ゝ歎聞、無拠相聞得申ニ付、左之通御聞届被下候様奉願候、以上

一壱貫目　　番代
一五百目　　手伝

一五百目　　石川・河北御扶持人等組才許手代

右之通御聞届被下候ハヽ、当盆半高、当暮半高御郡余荷を以相渡申度奉存候、依而別紙相添御達申上候、此段御聞届被下候様奉願上候、已上

子
七月　　北村与右衛門等
　　首座八人

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

御附札

本文之趣承届候事

三刕
子　　御郡奉行印
七月　　改作奉行印

覚

壱貫目之内
一五百目　　番代増給銀当盆渡り

五百目之内
一弐百五拾目　　手伝右同断

同
一同　　右同断

〆壱貫目

右増給銀渡之義、今日御聞届ニ付、当盆渡り右銀高相渡之候事

子
七月十二日

御扶持人
番代
五左衛門殿
同
手伝中

覚

一銀弐枚　放生津新町菓子屋　権四郎
一銀弐枚　放生津町湊屋　仁兵衛
一銀弐枚　姿村　斎十郎

〆

右随壱講書算、此末追ゝ世話多相成候ニ付、当年ゟ毎歳右銀高為骨折相渡可申候間、造用渡之内江指引相立、決算有之様致度候、以上

子
九月十七日

南善左衛門
折橋理三郎
高嶋庄右衛門

右書算方
主附中

覚

一銀弐枚

右随壱講書算方、此末追ゝ世話多相成候ニ付、当年ゟ毎歳右銀高為御骨折御渡可申候間、造用渡り之内江指引相立、決算被成候様仕候、右之趣得御意候、以上

子九月十七日

南善左衛門等三人
大門新町
六兵衛様

覚

一金壱両

右随壱講書算方、追ゝ世話多ニ付、当年ゟ毎歳為骨折前段之通相渡可申候間、造用渡之内江指引相立、決算可有之候、以上

子九月十七日

南善左衛門等三人
手代
仁左衛門殿

他之御領御境等御番所被仰付、組外様等御出役御召仕被成候分料銀等詮義仕、御達可申上旨被仰渡奉得其意申候、依而私共示合候処、右銃卒飯米之義ハ、当分手軽御出張之村方ニ而為相弁、後ゝハ間之内借上、自分ゝゝ焚出仕候ハヽ可然奉存候、尤昼夜共相勤候間、一日飯米壱升、塩四才、味噌弐夕御渡可然、右ハ諸郡平均直段飯米壱升代壱匁壱分、塩四才代壱毛弐孫(糸)四、味噌弐夕代四厘、都合壱匁壱分四厘壱毛弐孫(糸)四御渡可被下候、右之外壱日料銀四匁御渡被下候ハヽ可然奉存候、将又右銃卒之内御出張ヶ所隣村等道程半里之内ゟ罷出、自宅ゟ焼飯取寄相弁候者ハ一日料銀五匁御渡、右之内ニ而飯米・塩味代相弁候義ニ被仰付候ハヽ可然奉存候

一右之通料銀取図、御達申上候得共、若其内身元相応之者抔料銀御

渡願不仕向も可有之哉、是等ハ其時ゟ御達方可仕与奉存候、右私共示合御達申上候、以上

子八月　　北村与右衛門等

諸郡首座壱人宛

御附札　本文之趣御算用場江相達候処、銃卒為相詰候料銀之義等、其元中詮義之通御用番年寄中御聞届之段、右場ゟ御郡所（ママ）申来候之条、可得其意候事

御奉行所

諸御郡ゟ組ゟ等手代共増給銀之義、先達而以来願出居申ニ付、盆前石川・河北両御郡組ゟ手代等増給銀之義御願申上、御聞届被仰付候、右両御郡之外能美郡等六郡組ゟ等手代共増給銀之義、私共重ゟ詮義仕候処、先達而已来諸色高直之義相凌も無御座、其上近ク御用も多ク何れも烈敷相勤候間、雑用相懸り候義相凌も無御座候、去亥年御達申上、手代壱人江百目増之義御聞届被仰付置候得共、春来別而諸色高直ニ而弥増難渋仕候趣重ゟ相歎、無拠相聞得申ニ付、当暮万造ゟ手代壱人江百目宛相増、都合弐百目増給銀相渡申度奉願候

一輪嶋・宇出津御出張所手代之義、去年弐百目増方御聞届被仰付置候得共、当暮ゟ五拾目相増、弐百五拾目相渡申度奉存候

右之趣小紙を以御伺申上候間、御聞届被下候様奉願上候、以上

子十一月　　能美郡等六郡

御扶持人首座連名

御郡

御奉行所

御改作

御奉行所

覚

一百目宛　才許一組手代壱人当り当一作増給銀

一百目宛　無組御扶持人方并御扶持人首座方手代壱人当り、右同断

一百五拾目宛　首座之外御扶持人方物書料銀増御扶持人方壱人当り

一百目宛　枩木・小枩・東岩瀬御郡所詰惣代壱人当り、右同断

一百目宛　枩木・小枩相談所詰手代、右同断

一五拾目宛　輪嶋・宇出津御出張所詰手代、右同断

一百目宛　金丸相談所番手代壱人当り、右同断

但右口ゟ人数ニ応相渡申度奉存候

〆

子十一月　　諸郡

諸御郡組ゟ才許方料紙代之義、弐百五拾目ゟ四百五拾目迄之定銀ニ安政元年取極、御聞届被仰付置候、然処御仕入紙之外、去年已来紙甚高直ニ相成、過分引足仕迷惑仕候間、当暮ゟ一組江百目宛定銀相増、万造江相立申義御聞届被下候様奉願上候、石川・河北両御郡之義ハ、当盆前百目増之義御聞届被仰付候義ニ御座候、以上

子十一月　　能美郡等六郡御扶持人首座連名

御郡

御奉行所

御改作
御奉行所

諸御郡ゟ御扶持人名先之外、次御扶持人方御郡御用ニ召仕候物書料銀弐百五拾目宛、御郡ニ万造ゟ相渡候義御聞届ニ相成居候得共、近ク御用書物も多御座候而、雇料相増、いつれも迷惑仕候間、何卒当年より百五拾目相増、都合四百目相渡申義御聞届被下候様仕度奉伺候、以上

子十一月　諸郡御扶持人首座連名

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

諸郡共組ゟ手代給銀安政元年取極、左之通

能美郡　石川郡
河北郡

一弐貫五百目一組手代三人　一弐貫八百目　一組手代三人
内　弐貫目　御郡万造ゟ取立　内　弐貫三百目　但万造取立
五百目　主人ゟ相渡　五百目　主人ゟ相渡

〆

口郡　奥郡

一壱貫七百五拾目一組手代雇共　一壱貫八百目　一組手代三人
三人　内　内
壱貫三百目　御郡万造ゟ取立　壱貫三百目　御郡万造ゟ取立
四百五拾目　主人ゟ相渡　五百目　主人ゟ相渡

〆

射水郡
新川郡

一壱貫八百目　一組手代三人
内　内
壱貫三百目　御郡万造取立
五百目　主人ゟ相渡
外三百目　布施山開手代
壱人

無組御扶持人当分才許仕候節、其組手代給銀三割減可仕覚

能美郡
石川郡・河北郡
口郡・奥郡・砺波郡
射水郡・新川郡

弐貫目之内　一六百目
弐貫三百目之内　一六百九拾目
壱貫三百目之内　一三百九拾目

〆

亥十二月
下ケ札
諸郡共一通り御扶持人組才許仕候人ゟ
諸郡共首座之外、組才許仕候御扶持人

下ケ札
一弐百五拾目　手代給銀御郡　諸郡無組御扶持人之外、首座
等万造ゟ取立　御扶持人手代給銀
諸郡とも首座御扶持人　但無組御扶持人首座ニ候得とも、
手代給銀　別段首座手代給銀取立不申候

一五百目　能美郡　一五百目宛　口郡
一壱貫目　石川郡　奥郡
一八百目　河北郡　砺波郡
一四百目　上下新川郡　射水郡

〆

無組御扶持人手代給銀
　但当分才許不被仰付之分
一壱貫五百目　手代雇とも三人
　内
　壱貫目　御郡万造ゟ取立
　五百目　主人ゟ相渡

右之通安政元年・二年ニ御取極被仰渡候、然処無組御扶持人ニ而組当分才許仕候者之義等、此度私共示合、左ニ奉伺候

一無組御扶持人江組当分才許被仰付候時ハ、手代給銀壱貫目御郡万造ゟ取立候分其侭仕置、右手代組方御用ニも召仕、組手代三人之処壱人者相減、給銀も其御郡ニ指定候銀高之内三割減方仕可申与奉存候

一無組御扶持人ニ而、布施山開当分才許被仰付候とも、右ハ壱組ニ而も無御座、手代も壱人ならて罷在不申候間、手代給銀増減無之事ニ可仕奉存候

一無組御扶持人他郡御用兼帯仕、他郡ニ而組当分才許之有無ニ不抱(拘)、其御郡定之首座手代給銀其御郡万造ゟ取立可申候、但当分才許不仕者之手代給銀七百目取立可申与奉存候
　但自郡ニ而ハ御代官米納方等も有之ニ付、壱貫目取立可申候

右之趣奉伺候間、尚御指図被仰渡可被下候、以上

亥十二月

北村与右衛門
廣瀬太兵衛
吉多市十郎
石崎市右衛門
筒井内記
得能覚兵衛
南善左衛門
神保助三郎

御郡
　御奉行所
御改作
御奉行所

覚

是迄七拾五匁渡り
一百五拾目　下村備荒倉番人弐人

是迄七拾五匁渡り
一百五拾目　小杁備荒倉番人弐人

去年七拾目宛相渡
一百五拾目宛　大門籾御蔵番人弐人

当年初而渡り
一百五拾目　泉籾御蔵番人

〆

右備荒倉等番人給銀之義、是迄七拾目宛斗下村ゟ取立相渡来候得とも、近年諸色高直等ニ而、是迄之給銀ニ而ハ迷惑罷在候体ニ付、

今度御郡示談之上、寅前給銀渡り之姿も有之ニ付、前段之通番人壱人江百五拾目宛当年ゟ相渡申事ニ詮義仕候間、此段人ゟ江御申渡可被成候、尤右給銀等是迄其御蔵ヶ所切斗下村ゟ割符取立来候得共、已後御郡惣籾高割ニ仕候義御聞届ニ付、先日組ゟ廻状仕置候通ニ御座候間、此義も為念申進置候、先ゟ御廻、留ゟ御返可被成候、以上

子十一月晦日　南
折橋

加納様等

今度御出張所御賄方小遣之義、是迄御郡所并御貸屋御門番相勤来候権右衛門義、御郡所御門番此度御指除被仰付候間、御出張所御門番迄ニ被仰付、右賄方小遣相兼申事ニ被仰付候ハヽ可然与奉存候、且又右権右衛門年中料銀之義一日壱匁図を以、三百六拾目御渡被下候ハヽ可然奉存候、猶御詮義之趣被仰渡可被下候、右之趣御聞届被下候上ハ、御郡所御門番人之義追而人撰御達可申上与奉存候、以上

十二月　南等

御郡
御奉行所

覚

射水郡打出本江村出張銃卒、八月十日ゟ九月十八日迄日数三十九日分、一日拾人宛御在番組外様御引取後、九月十九日ゟ十二月廿日迄日数九十一日

一弐貫弐百
　拾匁三分　分、一日弐人宛、都合五百七拾弐人之内、百四拾弐人隣村等并身元之者共御渡方願不申者引去、残四百三拾人分御雇料并飯米・塩噌代とも壱人ニ付壱日五匁壱分四厘弐孫(糸)宛

右打出本江村江銃卒当八月十日ゟ十二月廿日迄出張仕候分、御雇料等書上申候間、右銀高早速御渡被下候様奉願上候、以上

子十二月　南善左衛門
折橋理三郎
高嶌庄右衛門

青地半四郎様等四人

覚

当三月
一三貫七百九拾　飛弾(騨)守様小杉新町御泊、下宿余内同町ゟ願出候
　七匁五分　銀高別冊之表

内
壱貫五百目　余内銀
当五月
一壱貫八百三拾　稠松様同町御泊、右同断
　九匁七分

内
七百目　前同断
当十月
一五貫五百廿九匁　飛弾(騨)守様御帰村之砌　御泊、右同断
　四分

内
壱貫五百目　前同断
当五月　公義御役人様御通行、同町御休等ニ付

一八拾壱貫弐百　右同断
七拾七文
去十二月等右同断、波多野鍋之助様等御泊、并
一四百六拾三匁　御守殿様御付御女中御昼ニ付右同断
五分三厘
二口〆壱貫弐百七拾六匁三分

内
三百目　前同断

余内銀
〆四貫目　御郡割余内奉願候

右小杉新町ニおゐて飛弾(驒)守様御等御泊之砌等下宿余内之義、同町ゟ願出、組才許ゟ夫ゝ御達申上候処、右余荷銀之義詮儀仕可申上旨被仰渡、則右帳面御渡ニ付内輪詮儀仕、右町方遠見聞合人足賃等之分ハ、駅方ニ而可相勤品ニ付、指省下宿余内迠御用宿之振を以取図見候処、惣様ニ而五貫目ニ相成候内、八歩通り四貫目御通方雑用割ニ被仰付可然奉存候、依而御渡之帳面五冊相添、私共詮儀之趣小紙を以御達申上候、以上

子
十二月

南善左衛門
折橋理三郎
高嶋庄右衛門

御郡
御奉行所

丑三月廿一日聞届　御郡所飛脚半六義、右飛脚賃仕入方江三百目借用願出候内、如此承届貸渡候事
一弐百目

小枩新町本江屋源七・今井屋長三郎両人儀、御郡所金沢行定飛脚相勤罷在候所、病身ニ而勤兼、免除願書付指出、組才許南善左衛門等江呼出詮義有之所、諸色高直ニ而引合兼、壱度分壱貫六百文宛御渡ニ相成居候得共、今壱貫百五拾文増方、壱貫七百文宛渡呉候得ハ、如元召遣呉候様之願主意也
一是迠一ヶ月切翌月賃銭御渡被成候へ共、三月ゟ六月迠閏月共六ヶ月分之内、中勘銀六百目飛脚賃御引当、無利足を以拝借致度願之主意也
右之趣意ニ付願書〇断略ス(文段)、元治二年正月十八日願也

右御附札
本文願之趣無拠相聞得候ニ付、格別之趣を以当一作願之通承届候、尤中勘銀縮之儀者所役人共ニおゐて為取極置、可遂詮儀候条、得其意、此段是迠之通相勤候之様申渡、受書取立可指出候事

丑二月

神戸金三郎印
中川丈之助印
大野織之介印

本文之通承届候条、御郡万造ニ而銀高弐百四十目取立相渡候事
神戸金三郎印
中川丈之助印
大野織之介印

覚
丑正月

一六拾目　御郡所小使弐人、壱人江三拾目宛
一六拾目　同日懸小使弐人、壱人江右同断

一六拾目　御門番弐人、壱人江右同断
一六拾目　牢番人弐人、壱人江右同断
〆弐百四拾目
右小杖御郡所小使等近年勤方多端ニ相成、且年〻諸色高直ニ相成候所、是迄之被下方迚ニ而ハ相勤兼、難渋仕候ニ付、何与ぞ御増方之義去暮相歎申ニ付、夫〻申諭為押堪置候得共、何分歎之趣実〻無拠次第ニ相聞得申候間、前段銀高共一作為増方御郡万造ゟ取扱相渡申度奉存候間、願之通御聞届被下候様仕度、此段奉願上候、以上

丑正月　南　折橋　高嶋
青地様　神戸様　中川様　晦日ニ達ル
大野様

去〻年四月
御守殿様御通之砌、小杖新町　御中休之節、同所八左衛門方ニ而御用人様御宿仕候様被仰渡、尤御見分も被仰付、所〻普請手入方御談も被成置、夫〻出来之上、首尾能御宿も相勤申義ニ御座候、然処入用銀去〻年暮八左衛門手前ニ而も難渋仕罷在、出道も六ヶ敷御座候ニ付、先私共為役用銀子壱貫七百目拝借奉願、貸渡置申候処、去暮之所元利壱貫九百四匁之分八左衛門手前難渋仕、全クハ指出得不申、右之内五百目返上仕、残銀之義御用捨被下候様、去暮私共迄願聞申ニ付、委曲小紙を以御願申上置候通ニ御座候、右ハ八左衛門手前難渋仕、右之外出方所詮出来不申体ニ御座候間、何卒八左衛門五百目指出候残壱貫四百目余之分、半高七百目（御償被下候ハヽ、残半高七百目）〇之分ハ私共手前ニ而幾重とも取扱相渡候事ニ可仕候間、此段御聞届被下候様仕度、重而小紙を以御願申上候、以上

丑三月　南善左衛門
折橋理三郎
高嶋庄右衛門

御郡
御奉行所

御付札　本文願尚更取しらへ、遂詮義候処、無拠趣ニ相聞候ニ付、本文銀高之内七百目格別之詮義ヲ以御郡所償方、願之通承届候条、得其意、此段八左衛門江も申渡、残り銀壱貫弐百四匁之内五百目八左衛門ゟ可指出分、并其元中手前ニ而取扱出候分とも、右銀高取揃早速可致返納候事

丑三月　青地半四郎印
不在合　神戸金三郎
中川丈之助印
大野織之助印

小杉八左衛門拝借之銀子之義ニ付、過日御達申上置候小紙、御付札物今日中川様ゟ御渡ニ御座候、仍而送り上候間、八左衛門ゟ五百目出候様、右御付札物之主意被仰談可被下候、七百目御郡ゟ出候分ハヽ、此表ニ而調達可仕と奉存候間、八左衛門ゟ銀子出候ハヽ、於御前可被下候、送り上可申、尚御相談申上候、以上

丑四月四日　南善左衛門
折橋理三郎様

高嶋庄右衛門様

右紙面等一件、四月十日小杉八左衛門方へ送り遣、早速五百目出方申遣、其節御付札物一集ニ相返候様申遣置候事

覚

一三百五拾目　小杦定飛脚両人年中増給銀願高

右定飛脚是迄年中壱貫目宛定銀ニ而万造ゟ取立、小杦御郡所ゟ御渡ニ相成来候得共、近年諸色高直ニ而、道中并金沢表宿賃等弥増高直ニ相成迷惑之趣、去年已来毎歳度願聞、相遠も無御坐ニ付、右銀高相増御郡万造ゟ取立相渡申義御聞届被下候様奉願上候、左候へ者増銀之義ハ私共等ゟ相渡、成丈為心得御用状等大切ニ為指運申度奉存候、此段御達申上候間、御聞届可被下候、以上

子十二月　南　折橋　高嶋

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

本文増銀三百五拾目、願之通格別之趣を以承届候条、可得其意候事

丑正月　御郡奉行　印
改作奉行　印

覚

七百目之内
一三百五拾目　番代増給銀盆渡り
三百五拾目ノ内
一百七拾五匁　手伝、右同断
三百五拾目ノ内
一百七拾五匁　右同断
〆七百目

右増給銀渡之儀、今日御聞届ニ付、当盆渡り右銀高相渡之候事

丑七月十三日　御扶持人
番代　五右衛門殿
同　手伝中

覚

一五拾両　通用金
代三貫四百目

一弐百四拾四匁八分　諸郡ニ付四百両調達、二月ゟ六月中迄利足、射水当
〆三貫六百四拾四匁八分　通用銀

但壱歩弐朱之利足を以当十二月中返済極候

右通日用人夫雇頭江諸郡ニ付四百両調達相渡置候分、八郡割射水郡当り拙子共為役用致借用処、如件

慶応元年七月　南善左衛門
折橋理三郎
高島庄右衛門

太田屋
番代
五右衛門殿

覚

一四百両　当二月▨通日用上縮江御渡ニ相成調達金
代銀弐拾七貫弐百目
此分八郡江調達方割
三貫四百目　壱郡当り

一壱貫九百五拾八匁四分　右四百両当二月ゟ六月中迄六ヶ月
壱ヶ月壱匁弐分之利足
此分八郡江割
弐百四拾四匁八分　壱郡当り

〆
丑六月

去年通日雇人夫賃銀渡方之方江当春別紙之通銀高調達を以雇頭之人ゟ江貸渡置候所、今以本勘渡りニ相成不申ニ付、雇頭ゟ返済不及故、今程諸郡割ニ仕、調達之向江相渡置候ハヽ可然御座候間、御郡ゟ当り御調達被成、早速番代平治方迄銀子〇御渡可申儀ニ御座候、以上
可被遣候、本勘渡りの上ハ雇頭ゟ取立、
御郡ゟゟ江銀子〇
丑六月七日　石崎市右衛門
南善左衛門

諸郡
御扶持人中様

覚

一四百四拾三匁八匁四厘　半紙・筆・墨・茶等品ゟ代
但石川・河北一郡当り百拾匁九分六厘宛
（朱書）「此銀高六郡割り之分ニ付、当暮万造方へ書出方番代江申渡置候、

六郡一郡当り三拾六匁九分九厘宛

尤取替為弁置候事」

去暮以来人夫方ニ付御荷物過目増賃等
一壱貫八百五拾五匁　五分壱厘　度ゟ入用并郡用〇中打等料紙・寄合入用等品ゟ
但八郡割弐百三拾壱匁九分四厘宛
（朱書）「此銀高当暮御手当造用江書出方之義、番代江申談置候、尤暮迄取替為弁置候」

但弐百六拾八匁九分三厘　射水郡
外御郡略ス

右諸郡入用致割符候間、御郡当り晦日中番代平次江御渡可被成候、此状早ゟ御廻、留ゟ平次江御渡可被成候、以上
丑七月十一日　石崎市右衛門
南善左衛門

諸郡
御扶持人中様

右御廻文写取上申候、銀高之義先取かへ渡置可申候、以上
丑七月十一日　番代　五左衛門
御扶持人中様

覚

一六拾文　道程壱里迄
一五拾五文　同壱里半ゟ弐里迄
一五十文　同弐里以上之分
但是迄壱里ニ付四拾文宛ニ御座候得共、去年割増御詮義之上、御定之賃銭

外ニ

拾文　当年ゟ壱里ニ付如此増方相願居申候
一百五十文　金沢行之分去年割増被仰付候外、増方相願居申候
外ニ
百文　当分宿料増御願申上候
〆
右之通飛脚賃増方、組ゝゟ相願候、文畧ス
丑八月　十組村肝煎
御扶持人衆中等

付札
本文飛脚賃遠近ニ不抱(拘)、当分之処壱里六拾文図、且金沢行宿料増共願書之内壱度ニ弐百文聞届候事
丑八月　御扶持人

小杁御郡所・相談所飛脚賃定

一三十五文　橋下条村行　一七拾文　作道村行
一八十文　大門新町行　一百文　北野村行
一百十五文　嶋村行　一百十五文　中川村行
一弐百四十文　五十里行　一四百六十五文　加納村行
一五百三十五文　藪田村行　一三十五文　新開発行
一三拾文　本開発行　一三十五文　小杁三ヶ村行
一六十文　小林小嶋八塚村行　一百五十文　高岡行
一百七十文　横田行　一弐百十文　守山行
一百八十五文　下八ヶ新村行　一三百八十五文　布施村行
一四百弐拾文　氷見行　一四百十文　窪村行
一四百九十文　鞍川村行　一弐百四十文　内嶋村行
一三百五十文　福岡村行　一四百九十文　今石動行
一五百六十文　埴生村行　一七十文　水戸田行
一百六十文　中田村行　一弐百三十文　戸出村行
一三百五十文　杁木行　一廿五文　今開発行
但大門廻り四百廿文
一弐百五十文　伏木村行　一四十文　今井村行
一六十文　殿村行　一七十文　高木行
一百十文　上牧野村行　一百六十文　吉久新村行
一百九十文　放生津町行　一弐百十文　六渡寺村行
一百四十文　堀岡新村行　一弐百六十文　串岡村行
一三十文　大手崎村行　一弐百五文　海老江村行
一廿五文　戸破村行　一百十文　下村行
一弐百文　打出本江村行　一百十文　願海寺行
一五十文　稲積村行　一弐百文　二塚村行
一八十五文　大白石村行　一五百六十文　柿谷村行
一五百文　井波村行　一弐百八十文　冨山行
一三百文　東岩瀬行　一七十五文　東津幡江村行
一七十五文　西高木村行　一百十五文　柳俣開行
一九百文　魚津行
〆
右之通飛脚賃請負之義、半六・長七願出候、文中畧ス

丑五月
御郡所
御詰番中様
本文飛脚賃増方之義、聞届候事
丑
五月　御扶持人

御郡御奉行所御夜具・ふとん等御壱人前、去ル亥春御窺申上候処上、夫ゟ出来方御談被下候ニ付、出来仕置、其後代銀等書上置申候得共、未タ御渡無御座候間、何卒右代銀御渡被下候様、小紙を以御願申上候、以上
丑
八月　小枩新町五歩一屋　新四郎
南善左衛門様等
三人

覚
一五百六拾弐匁五分　御壱人前　夜具代
り百拾弐匁五分　亥三月ゟ子十二月迄弐十ヶ月
〃六百七拾五匁
り八拾七匁七分五厘　丑十二月迄
〃七百五拾弐匁七分五厘

右之通書上申候間、御渡被下候様御願申上候、以上
丑
八月　小枩五歩一屋　新四郎
付札
本文銀高、当暮御郡造用方江相立渡可申候事
丑
八月廿日　御扶持人印印印

覚
是迄三百六拾目
一百目増銀相談所向小遣人江御願度候（ママ）
去年迄弐匁五歩
一三匁　寄合中雇人足長七等江日用壱人代料
御渡之様御願度候（ママ）
一壱匁五分　右同断、女雇日用銀
右当時諸色追ゝ高直およひ人払底ニも御座候間、御詮義御願申上候、已上
丑
八月　相談所　藤右衛門
付札
本文小遣并長七等雇料増方之義、聞届置候事
丑
八月廿日　御扶持人印印印

諸御役人御用宿壱飯ニ付壱匁五分宛、嘉永度取極御達申上、御聞届ニ御座候処、其後次第諸色高直ニ相成、去年以来ゟ壱匁五分ニ而ハ

相勤候者無御座ニ付、所方余荷を以相弁来候由ニ而、増方願聞候ニ付、詮義仕候処相違も無之、依而諸郡示談之上、壱飯ニ付五分宛増方御聞届被下候様仕度奉願候、此段小紙を以御伺申上候、以上

丑七月　北村与右衛門　廣瀬太兵衛　垉多市十郎
石崎市右衛門　筒井内記　得能覚兵衛
南善左衛門　神保助三郎

御郡
御奉行所
御改作
御奉行所

裏書

表書之通承届者也

御郡奉行印
改作奉行印

覚

壱日
一五匁五分
同
一四匁五分
同
一三匁
〆

右之通当年改料銀取極、組ゟ江廻状いたし候事

丑
八月十一日

殿村
垉兵衛
縄張人
竿取人

取極也

覚

去ゟ二月ゟ伏木浦御在番様方御詰中諸道具買上代、并小遣人足等賃銀与も〆三貫四百弐拾四匁八分五厘之内、八百九拾弐匁壱分四厘、御引上後跡道具売払代銀引去候跡、御郡余内願銀高

内
三百五拾六匁　御用之御鉄炮等高岡迄持出人足等、宿継之品ニ而所ニ而可相弁品等指省可申候

残而
弐貫百七拾六匁七分壱厘　右同断、放生津御在番様御詰中諸道具買上代銀等〆弐貫七百六拾七匁八分九厘之内五百九拾壱匁、御引上後跡道具売払銀引去、跡御郡余内願銀高

内
五百八匁壱厘　右買上物等ニ当ル、利銀等不当之品指省申候

残而
壱貫六百六拾目八分八厘

二口合
三貫八百三拾七匁　御郡余内ニ
五分九厘　被仰付可被下候

右去ゟ年二月ゟ伏木・放生津御在番様方御詰中御買上物代銀之内、御引上後跡道具売払候代銀引去、前段之通御渡方願出、組才許ゟ夫ゟ御達申上置候処、御郡余内詮儀仕御達可申上旨御附札を以被仰渡、奉得其意、御渡之帳面内輪詮儀仕候処、伏木之分、高岡迄御鉄炮等持出人足之義ハ、宿継ニ而所方ニおゐて可相弁品、且又水汲人足賃銀過分ニ相成居候ニ付半高相減、放生津之分、利銀多相立有之、伏

木ニおゐてハ利銀も不書出一様ニ不相成、且放生津之分去ㇾ年暮可書出処打捨置、去暮ニ至り利足附を以願出候義不相当ニ付、利足銀前段之通指省、残銀両所分〆三貫八百三拾七匁五分九厘御郡割ニ被仰付可然奉存候、尤両所とも払物代銀少分ニ相見得申ニ付、得与詮義仕候処、諸道具殊之外相損居、弁用之品無数ニ付精誠売立仕候旨申聞、無拠相聞得申候、依而右銀高御郡割之義御聞届被成下候様仕度、依而先達而御渡之帳面相添、此段御達申上候、以上

丑六月　　南　折橋　高嶋

御郡
御奉行所

御附札

本文伏木・放生津両所江在番詰中買上物代等、別冊五冊之表御郡余内願高之内、詮儀之上三貫八百三拾七匁五分九厘、今来年御郡余内承届候条、得其意、夫ㇾ割符取立可相渡候事

丑
七月　　大野織之介印
（砺波・射水郡奉行）
氏家立三郎印
神戸金三郎印
青地半四郎印

射水郡
御扶持人中
右組才許
十　村　中

尚以別冊共扣取揃可指出候事

決算寄合中

惣御預御代官分并上り知御代官分、氷見外畑寺社返上米納中、為雑用納米壱石ニ付弐分宛御渡被下候得とも、当年ヨリ弐分増方被仰付被下候様御願申上候、以上

丑
十二月　　惣御預并上り知米等
納人共
御扶持人中様等

本文惣預等御代官分納中造用方江当年ゟ弐分相増、都合石ニ四分相渡候義承聞置候事

丑
十二月十三日　　御扶持人印印印

覚

壱度分
一三百文　　金沢行飛脚当一作増
下倉垣組　上倉垣組　大袋組　下東條組
上東條組　二　上　組　西條組　南　條　組

壱度分
一四百文　　右同断
上　庄　組　八　代　組

右之通当一作増相渡候事

丑十二月　　御扶持人

御代官宿等飯代極

丑年暮取極
一壱匁七分　自身壱飯代
一壱匁五分　手代壱飯代
一壱匁三分　家来壱飯代
〆
一百目　福町金沢屋次助是迄渡り銀
外ニ
四拾三匁　丑年一作増方
〆

其許義御郡書算方ニ召仕可申ニ付、年中料銀与して銀子三百目相渡可申候間、可被得其意候、以上

丑八月廿日　南　折橋　高嶋

（朱書）「今三百目ノ内
弐百目　用水仕法銀　殿村　㐂兵衛殿
百目　別口仕法銀」

通日用人夫賃銀之方江当春夫と調達致し、金四百両雇頭共江相渡シ候処、本勘相渡不申、雇頭ゟ返済不及故、右銀高并利足共諸郡割ニ仕、当六月調達之向江相渡置申義御承知之通りニ御座候、就而者右人夫賃銀等決算未タ相立不申故、銀子御渡無御座、何れ年越ニも相成可申奉存候間、其御郡と調達人江前段之趣御談置可被成候、右之趣申遣度如斯ニ御座候、此状先と急速御廻シ、留ゟ御返シ可被成候、已上

丑十二月廿八日（十と）　石崎市右衛門

南善左衛門

諸郡
御扶持人中様

右廻文いたし候ニ付、写指懸（進カ）申候、本文銀▨（子）射水当り五拾両之分、当七月ゟ壱部三ノ利ニ而かり入置候分、五左衛門（と）ニ而調達申談置候間、左様御承知、元▨（銀）かり延利足迄御渡之事ニ可被成候、右之外御手当方御決算当廿日加刕御郡所江相達候上、当春ゟも五左衛門（と）御手当方人夫取しらへ、本勘可相立、左候得者彼是遅ク可申候間、大綱弐貫目斗中勘を以御渡置可然、去年分ハ先日折橋様御持参之通りニ御座候、以上

丑十二月十六日　金沢ゟ　南善左衛門

小枩ニ而
折橋理三郎様
高嶋庄右衛門様

覚

一三貫五百目　随㐂講別仕法銀

但百目ニ付壱ヶ月九朱之利足

右川口御寺旧財有之、今度御郡示談之上、右借財返弁為仕法頼母子取立候外手当無之分、前段随㐂講別仕法銀之内、右銀高御扶持人四人役用与して借り入相渡候、此仕抹方手代仁左衛門主附居候

寅三月寄合ニ而示談之事

覚

一四貫目　　通用銀
　但百(匁脱)ニ付一ヶ月壱匁之利足

右御主附波除仕法銀之内、為役用借用いたし○候義相遠無御座候、来ル寅六月中元利返済可致候、依而証文、如件

慶応元年丑十二月　　南等三人

放生津新町
彦九郎殿

付札

小杁出張所御普請方入用高銀弐百五拾五匁、今度御作事所ゟ相渡候ニ付相越之候条、得其意、猶更損所等時ゝ為取調理修理方差支(不脱カ)様可相心得候、以上

寅
三月十六日　　小杁
御郡所
御扶持人・十村中

「此銀高理三郎方ニ仕抹置候、寅年万造帳江(付札)可相立事」

一昨年御奉行所夜具新出来代壱貫五百拾七匁壱分御渡方之儀、小紙御達申上候処、右者御奉行所御夜具弐人前之御銀ニ候哉、此内ニ御家来衆之分も入テ之代銀ニ候哉、高橋氏ゟ尋之趣詰手代ゟ申聞候ニ付、委曲先日御申越承知仕、夫ゝ取調理、左ニ書記進申候

一六百七匁　　御奉行所夜具御壱人前之分、外ニ
　御寐呉座・御枕代共

一六百五拾壱匁　　御若党衆之分弐人前、外ニ枕・
　四分　　呉座代共

一弐百五拾八匁七分　　御家来分壱人前、外ニ呉座・枕・夜具入之葛
　渋紙・唐油紙代等品ゝ〆高

〆壱貫五百拾七匁壱分

右銀高書分進申候、以上

寅
三月廿七日　　南善左衛門
不在合
折橋理三郎

小杁
詰番中様

覚

草高百石ニ付
一六匁壱厘懸　　定検地出合打銀
　但火事家高引候分

同断
一弐拾壱匁六分　　去年御郡万造本かん打銀
　五厘三四ノ正(征)

同断
一五匁懸　　当暮渡り御郡万造中勘打銀

〆

右当年定検地出合打銀等取しらへ正(征)相立、廻文仕候間、急速御取立、来ル三日迄ニ理三郎方へ御指出可被成候、去暮調達いたし置、返済方利立之義も有之候間、日限之通無間遅御指出候様仕度候

一組ゝ渡り立用指引等之義近日廻文可仕候、取立方指支申ニ付、打

銀高迫申進候間、先ゝ刻附飛脚を以御廻達、納ゟ理三郎方へ御返
可被成候、為其廻状を以如斯ニ御坐候、以上

寅
六月廿六日　　南善左衛門
　　不在合
　　折橋理三郎印

各様

覚

一九拾目　　通用銀

右去年分一作増給銀、重而詮義之上相渡之候、以上

寅
七月　　御扶持人印

雇手代
太三郎殿

覚

一百目　　通用銀

右去年分一作増給銀、重而詮義之上相渡之候、以上

寅
七月　　御扶持人印

相談所ニ而
藤右衛門殿

覚

一金六拾四両壱朱与　　門前銃卒渡人夫日懸本勘

銀弐匁六分壱厘　　上縮福光村与四右衛門宿村与三郎渡

内

五拾両　　丑二月調達

代三貫四百目

此利　　丑二月ゟ同十二月迄閏月共〆
四百八匁　　拾弐ヶ月壱歩之利足

拾四両壱朱与

銀弐匁六分壱厘　　丑四月調達

代九百五拾八匁八分六厘

此利　　去四月ゟ同十二月迄閏月共〆
九拾五匁八分九厘　　拾ヶ月右同断

利足〆

五百三匁八分九厘

此分八ツ割

六拾弐匁九分九厘　　壱郡当

右門前銃卒渡人夫日懸本勘去二月書出候に付、調達を以相渡置候利
足、右之通割符いたし候間、御郡当銀高当月中番代市兵衛方江御渡
可被成候、此状御廻、留ゟ御返可被成候、以上

寅
二月廿一日　　石崎市右衛門
　　南善左衛門

諸郡
御扶持人中様

去丑二月門前渡銃卒人夫日懸調達銀利足、番代市兵衛渡諸郡廻文写取上申候、銀子ハ私ニ而取替、市兵衛へ相渡置申候

一春日社日御祈祷料、当年ゟ銀三枚相増申度旨伺小紙、御付札御聞届物写上ケ申候

寅
二月廿五日　　番代
　　五左衛門
南善左衛門様
　等

覚

一番代方江是迄御算用料壱冊ゟ拾匁宛渡来、越代官之分共作ゟ取立相渡来候得共、品ゝ手数ニも有之、弐拾目宛相渡候義ニ相成候而ハ如何

「当年ゟ五匁相増、壱冊ニ拾五匁ニ而可然奉存候、砺波抔増方僅之由ニ御坐候故、五匁増ニ而可宜候事」

一当春手上高等一件ニ付、格別番代骨折居候義、就而惣預口米当年之所八拾石余も有之ニ付、此内を以何与欤番代へ世話料相立候而ハ如何、一作之義ニも御座候故、程能御示談之事

但壱貫目ゟ下タニ而ハ不宜哉与心付申候、尚御考可被下候

「一作之品ニも有之事故、米ニ而五石代与して遣候而可宜与示談示談仕候事」

一飛脚賃之義、増方何れも相願居、何れ何与欤増方詮義付不申而ハ指支可申与奉存候

「是迄壱里ニ付八拾文ゟ九拾文迄之筈ニ御座候間、先月迄之分右ニ拾文増ニ御詮義被成可然奉存候、当月ゟ末ハ壱里ニ付百弐三拾文位ニも不相成候而ハ引合申間敷哉、猶才許中等も御示合御取極可被成候事」

一手代給銀願等増方兼而諸郡示談之一条、荒ゝ御取極ニ相成候ハヽ、早速様子御申越被下度、御聞届之上ニ而ハ手当方相渡指支申候、品ゝ調達方打重り居、仕法銀等夫ゝ調達之手当内治定不致而ハ、貸附方も指支申ニ付、此段得御意候

「手代給銀増等之分別冊進申候」

右為御示談申上候、思召御治定之所為御知可被下候事

十二月十三日夜

〔付記〕史料の調査・閲覧にあたっては、折橋禮一氏をはじめとする折橋家の皆様のご高配を賜った。また、野積正吉氏・木越隆三氏から折橋家文書の調査の機会を与えられた。記して感謝申し上げる。